

AATJ 2015 ANNUAL SPRING CONFERENCE

PART ONE

Sheraton Chicago Hotel and Towers, Chicago, Illinois
Meeting Rooms (Level 2): Michigan, Huron, Ohio, Mississippi, Colorado, Arkansas
Thursday, March 26, 9:00 a.m.–5:00 p.m.

(On-site Registration and Check-in: Level 2 Lobby)

*Papers whose titles appear in Japanese in the program will be delivered in Japanese;
those with only English titles will be delivered in English*

9:00 a.m.–10:40 a.m. — Session 1

SESSION 1-A: PEDAGOGY PANEL [HURON ROOM]

Chairs: Shinji Sato, Princeton University; Akiko Murata, Hosei University

Panel Title: 「人類学的視点からみた日本語教育」(Japanese Language Education: Anthropological Perspectives)

本パネルでは、日本語教育における人類学的アプローチの意義を検討する。従来の実証主義的な言語学習分析においては、学習を社会的な文脈から切り離し、抽象化した形での分析が主流であったが、近年では社会的な学び（学習が社会や他者との関係性の中で構築される学び）に光が当てられるようになってきている。また、そのような社会的学びを分析するために、エスノグラフィ、ケーススタディー、ライフヒストリーなど、人類学的手法も用いられることが多くなった。本パネルではこうした研究・教育の流れを汲み、日本語教育と人類学の両方の専門性を持った研究者が連携することにより、日本語教育にどのように人類学的視点、調査手法を応用できるかを示す。本パネルでは、まず最初の発表で、日本語・外国語教育に関連のある人類学の理論、方法論のいくつかを体系的に紹介する。その後、人類学の理論、方法論を使った教室実践のデータ分析を通し、日本語教育への具体的な提言を行う。本パネルで紹介する実践は、1) 日本における日本人学生と留学生の協働フィールドワーク教育、2) 米国学生の東北の津波復興支援、および、日本語教育実地体験活動、3) 米国大学におけるミニエスノグラフィプロジェクトの3つである。

本パネルでは、日本語教育においての社会的な学びを照射するために、人類学的の理論を取り入れた教室実践を行うこと、また、人類学的方法論を取り入れた教室実践のデータ分析をすることがなぜ重要なのか、4つの発表を通して会場のみなさんと一緒に考えていきたい。

「人類学的アプローチと日本語教育：理論と方法論」(Anthropological approaches and Japanese language education: Theories and research methods)

Shinji Sato, Princeton University

本発表は、日本語教育の実践、および、日本語教育研究に応用可能だと考えられる人類学的視点、調査手法を示すことを目的とする。まず、人類学の歴史を簡単に振り返った後、人類学と言語学との関係、人類学においてキーとなる概念、例えば、異文化（差異）を巡る分析、フィールドワーク、参与観察といった用語をわかりやすく説明する。その後、人類学の中で特に言語教育に関係のあると思われる分野（教育人類学、言語人類学、文化人類学）を簡単に紹介し、その中で重要であると考えられる理論をいくつか概観する。例えば、教育人類学においては、マイケル＝アップル（教育のポリティクス）ピエール＝ブルデュー（教育における再生産、文化資本）、ジーン＝レイブ（状況的学習論）、ヘンリー＝ジル（批判的教育学）などである。

また、「文化」や学びを記述、分析するために、用いられている人類学的手法（方法論）、エスノグラフィ、ケーススタディー、ライフヒストリーなどについても紹介を行う。これらの手法の紹介においては、どうして他の手法ではなく、あえてこれらの人類学的手法を使うのかという問題を、とくに客観性、データの解釈、自己再帰性（reflexivity）の問題について焦点をあて、振り返る。

最後に、筆者の行った人類学的視点を取り込んだ大学における実践「日本＝日本語＝日本人」を考えるという実践を簡単に紹介したい。この授業では、様々な読み物を読む中で、規範と実際を比べ、規範の恣意性、信憑性などについて考え、どのようにその規範と関わっていけるかを考えた。本発表では、この実践のデータの分析も含め、日本語教育に人類学的視点を取り込む意義を会場のみなさんと考えたい。

「多文化間フィールドワーク・プロジェクトと日本語教育」(Multicultural fieldwork and Japanese language education)

Akiko Murata, Hosei University

本報告は東京の私立大学で行われている「多文化間フィールドワーク」の実践について報告し、文化人類学から発展したフィールドワークが、留学生と日本人学生の協働調査活動（「多文化間フィールドワーク」）にどのように取り入れられ、そこにはどのような学びがあるのかをLave & Wenger (1991)の状況的学習論と結び付けて明らかにする。本報告は、2014年1月から2014年7月までの期間に行われた留学生と日本人学生（合計80人）の協働フィールドワーク活動を分析の対象とするもので、分析対象となったデータは、学生間のフィールドワークの録画・録音記録、インタビュー記録、フィールドワーク成果発表会の録画記録、そして学生間の相互フィードバックシートなどである。本報告では、第一に報告者が勤

務する大学で行っている多文化間フィールドワークの教育デザインを紹介し、日本語教師と英語教師が協力して行っている日本人学生と留学生の協働フィールドワーク教育の教育的な文脈を明らかにする。そして、学生のフィールドワークの2つの事例に焦点を当て（「ソーシャルマイノリティとしてのタトゥーのフィールドワーク」、「社会抗議活動の集会を巡るフィールドワーク」）、具体的な学生グループの協働調査のプロセスを分析する。これにより、多文化多言語環境の学生グループが現地調査を通じてどのようなことを学ぶのかを、特に日本語教育と関連付けて明らかにする。そして最後にこのようなフィールドワークの取組を日本語教育の授業で具体的にどのように取り入れることができるのかについて私見を述べる。

「ミニエスノグラフィー：人類学的フィールドワーク手法の言語文化学習への応用」 (Mini-ethnography: Application of anthropological methods to Japanese language and culture training)
Hiroaki Kawamura, University of Findlay

人類学的理論、手法は、教育人類学という下位分野の存在にも示されているように、教育研究に広く用いられている。外国語教育においても、Jurasek (1995)は、参与型観察を留学前のオリエンテーションの活動に取り入れ、Robinson-Stuart & Nocon (1996)はエスノグラフィックインタビューを教室内の言語教育活動に取り入れている。しかし日本語教育においては、人類学的理論、手法の応用は今も限定されているように思われる。本発表は、2011年と2013年のパイロットプログラムの結果をもとに、人類学的理論、手法の日本語教育への応用の可能性について考察する。2011年のプロジェクトでは、米国人3人の学部生が日本において「共生」という共通テーマをものに4週間にわたる調査研究を行った。参加学生の言語レベルはACTFLの中級上、中級下、初級上（非公式）で、調査手法としてエスノグラフィックインタビュー、参与観察を主に用いた。筆者はアドバイザーとして参加し、準備、日本でのフィールドワーク、データ分析、報告書作成のために1年間にわたり参加学生の言語使用活動を観察した。2013年のプロジェクトは、4ヵ月にわたる「日本での動物と人間の関係について」の文化調査で、データ収集の1部として3月に日本での1週間の調査旅行を行った。参加学生の日本語レベルはゼロから中級と広い範囲にわたり、日本では言語レベルに留意したエスノグラフィックインタビューと参与観察を試みた。本発表では、プロジェクトを通じての参加学生の日本語使用様式の観察、学生のフィールドワーク日誌、参加学生へのインタビューなどをデータをもとに、人類学的理論、手法の日本語教育への応用、応用の際の留意点、問題点などを考察する。

「東北の被災地ボランティアと日本語教育：民族誌法が生んだ岩手での津波復興支援活動と日本語学習実地体験」 (Volunteer activities in Tohoku and Japanese language education)
Christopher Thompson, Ohio University

文化人類学の手法の一つエスノグラフィー（民族誌）の基本的な趣旨は、年月をかけて他者の考え方や問題意識、そして価値観などを探り出す事である。筆者は、3.11の大惨事後、岩手県での25年間にわたるフィールドワークの経験を生かし、津波復興支援ボランティア・プロジェクトを立ち上げた。プロジェクトの活動計画は、陸中地区の被害者の希望を中心としつつ、学生の日本語学習者としての視点をも取り込んで作成された。本発表では、被災者の意思を基盤としつつ立てた支援計画を、岩手県立大学の教職員と学生と共に、どのようにして実践してきたかについて報告する。これは、勤務校の学生の4年間にわたる被災地ボランティアという枠組みでの日本語学習実地体験の発表である。

SESSION 1-B: PEDAGOGY PAPERS [MICHIGAN ROOM]

Chair: Atsushi Fukada, Purdue University

「初級(上)日本語コースの書く練習課題をフェイスブック非公開グループでコミュニケーションにつなげる実践プロジェクト」 (Incorporating writing assignments into Facebook communication in high beginning Japanese language courses)
Ikuko Patricia Yuasa, Illinois Wesleyan University

日本語学習にブログやFacebookなどのソーシャルメディアが利用できるのは、中級上級レベルに限られているという先入観がある。この実践プロジェクトでは、初級レベル2年目の学習者が、コミュニケーションをするという目的に必要な語彙や文法の実際の使い方を習得していく段階で表現できる内容の短い文章をフェイスブックに投稿することで、書いてコミュニケーションをする能力を養うことを目的とした。非公開グループを利用することで、コミュニケーションをする相手は、クラスメート、教師、コースのアシスタント、あるいは日本に住んでいる教師の家族や友人など、学習者の投稿の目的を十分理解している参加者のみに限られた。ブログやFacebookなどのソーシャルメディアの利用を外国語学習のコースに含める際の問題点は、投稿した学習者の間違いを教師が修正する余裕がなく、学習者同士で間違いを共用したり間違いが化石化したりするという点にある。さらに、コミュニケーションを優先させるために、コースで学んだ難易度の高い文型、慣用句、言い回し等を避ける傾向もある（沼田 2010年）。この実践プロジェクトは、コースの目的に沿った「書く練習」の課題を投稿するという方法がとられたため、学習者はすでに教師によって評価が終わった完成度の高い日本語を使って投稿することができた。後のアンケートでは、「日本人参加者による学習者が使用した日本語そのものについてのコメントは非常に貴重だった。」、自分のペースでコミュニケーションの練習ができた。」、「Facebookと言う国際的なコミュニケーション手段においての日本的なコミュニケーションの仕方を学んだ。」などの見解が目立った。

「初級学習者の作文指導:ブログを使ったコミュニケーションのための作文プロジェクト」 (Writing task for elementary learners as a communication activity using blogs)

Naemi McPherson and Hiromi Uchida, University of Hawai'i, Manoa

外国語作文は、上級学習者にとっても容易なことではない。限られた語彙と文法知識しかない初級であれば、その困難はなおさらである。しかし四技能習得を目指すコースでの作文は、表記・語彙・文型などの既習事項の使用機会を与え、定着化を促す活動(小宮1992、山本2013)として不可欠である。しかし、ワークブックの「〇〇さんからの手紙に返信する」のようなタスクでは、必要最低限の量、内容で済ませてしまう学生が多い。これは、学生が作文を教師による評価対象の一つと考え、コミュニケーション手段としての意義を感じていないからであろう。学習者の「書く」意欲や作文力の向上には、作文がコミュニケーションの手段であることを認識することが必要ではないだろうか。

川口(2011)は初級学習者の日本語能力伸長を支援するための「個人化」活動を提案している。「個人化」とは、既習表現の練習において、学習者個人の感情・経験・思想に関して話したり書いたりする作業を行うことである(川口2011)。そこで、学習者間でお互いの作文にコメントし合い、作文をコミュニケーション手段の一つとして捉えさせることにより、「個人化」活動としての作業が学習者の書く意欲を高め作文力の養成につなげられないかと考えブログ活動を試みた。「読み手」が存在するブログでは、「読み手」とのコミュニケーションが簡単にでき、活動の記録が残り、学習者の学習過程の変化がわかる(ナズキアン 2010)という利点がある。

本プロジェクトは初級学習者を対象に、「読み手」を意識させた学習者間の「個人化」活動が、作文に対する意識、内容にどのような変化をもたらすかを調査、分析する。

「バーチャルワールドを用いたコミュニケーション学習:日本語学習者のケース」 (Learning to communicate in a virtual world: The case of a JFL classroom)

Kasumi Yamazaki, University of Toledo

コンピューターを利用した言語学習(CALL)の研究分野では現在、シュミレーションゲームやバーチャルリアリティを活用した学習方法が注目されている。中でも、3D空間や大規模多人数同時参加型オンライン(MMO)を取り入れたプログラムを用いることによって、現実世界に類似した環境を提供し、ユーザー同士のコラボレーションも実現化された。また、その根本となるテクノロジーを用いた言語教育とその効用性についても、CALLや第二言語習得(SLA)分野では、近年最も研究が進んでいる。特に2013年に行われた大規模なメタ解析によると、CALLを用いた言語教授法は、CALLを用いなかった教授法より優れていたという結果が出ている(Grgurovic, Chapelle, & Shelley, 2013)。しかし、従来の研究は主にESLまたは西洋言語を中心としたものが多く、日本語学習者を対象とした実践検証・調査は稀少であり、研究そのものが十分ではない。

この問題の解決策として本稿では、CALLおよび第二言語取得論に基づいたカリキュラム:CALC (computer-assisted learning of communication)の実用性を、日本語学習者を対象に実践調査する。本稿で提案するこのCALCカリキュラムは3Dバーチャルワールドを用いたコミュニケーション学習をテーマとしており、調査対象者である日本語学習者(n=11)は、東京を再現した3D空間で四カ月間(アカデミックセメスター)、日本語能力の向上を目指してこの実践調査に参加した。そこで本稿では、調査中に回収したデータを定性・定量分析したのち、3Dバーチャルワールドを取り入れたCALCカリキュラムを、学習成果、カリキュラムの効用性、また学習者の意欲の三点から総合的に評価する。

「オンライン日本語コース受講者と対面式コース受講者の口頭能力の比較:客観的指標による実証研究」 (Comparison between the oral proficiency of online Japanese course participants and that of face-to-face course participants)

Atsushi Fukada, Purdue University

オンライン教育が盛んになる中、パデュー大学では、2014年秋学期よりオンラインで受講可能な日本語コースを開講し始めた。初中級レベルにおける最優先課題は口頭能力であるというのが一般的な認識であるが、非同期(asynchronous)モードの自習が中心であるオンラインコースにおいて、対面式コースと同レベルの口頭能力をいかに養成するかが大きな課題であった。パデュー大学では、この課題の一つの解決策として、次の二つを組み合わせたプログラムを考案した。

(1) Speak Everywhereをフルに活用した非同期モードによる基礎的な口頭練習。(2) 学生二人、教師一人による週一回20分の少人数リアルタイムセッションにおける応用的なコミュニケーション・アクティビティ。本発表では、この方式の効果を検証するために、オンラインコースを受講した学生の口頭能力を対面式コースの受講者のそれと比較した実験について報告する。

現在に至るまで、諸外国語の多数の先行研究がオンラインコースもしくはハイブリッドコースが対面式コースと同等の質の授業を提供していると報告している。しかしながら口頭能力の比較を客観的指標により実証的に行っているものは少なく、日本語ではまだない。

本実験の被験者はオンラインコース受講者15名、対面式コース受講者15名で、Q&Aとロールプレイからなるオーラルテストを全員に実施した。被験者の音声は録音され、スピーチレート、ポーズの数や位置、応答の即時性などの客観的指標とホリスティックな主観的評価を行なった。本発表ではその分析結果を発表し、オンラインコースでのスピーキングの教え方に関して考察を行なう。

SESSION 1-C: PEDAGOGY PAPERS [OHIO ROOM]

Chair: Nobuaki Takahashi, Elizabethtown College

「コース目標達成のプロセスの中での文法指導：中級クラスにおける試み」 (Grammar instruction as part of the process for achieving course goals: An Intermediate Japanese course as a practical example) Yoko Sakurai, The Japan Foundation, New York

近年、米国の日本語教育において内容重視アプローチが浸透を見せる中で、課題として頻繁に挙げられることの一つに「内容を深めることと併せて『日本語力の向上』の側面をどう組み込むか」というものがある。殊に中級以上のレベルでは、コンテンツの扱いに対して文法指導の比重が減る傾向もあり、学習者から「より多くの時間を文法学習に割いて欲しい」との声が聞かれることもある。このレベルでは生教材も多く使用されるが、その際の文法項目の選択の難しさは多くの教師が直面するところであろう。また、市販教科書を用いる場合でも、コース内容に応じて記載の文法項目や練習問題に工夫を加える必要が生じることもあるかもしれない。本研究の目的は、文法学習はゴール達成のプロセスを助ける一要素として位置づけられるべきではないかという考えを基盤に、旧来の文法偏重型教育への退行に陥ることなく、かつ文法指導を疎かにしない中級以上のコースデザインの在り方を模索することである。対象となったCEFRレベルB1クラス (ACTFL Proficiency Guidelineの中級・中～上にほぼ相当) では、「異文化体験について述べ、意見を交換する」というCan-do Statementをコース目標として設定し、そこから逆算して学習項目を選別するバックワードデザインを適用して、ゴールと緊密に関連させて文法の指導・練習を行った。ゴール達成という枠組みに沿って文法を扱う視点については、初級レベルでは既に具体的な提言が積極的になされているものの (野田2005、嶋田2008等)、中級以上についてはまだ少ない。今回の発表では、コース内容、学習者の反応を考察し、今後の課題について述べたい。

複合動詞の指導：偶発学習においてできること (Teaching compound verbs in the accidental learning environment) Miho Fujiwara, Willamette University

本研究では、習得が困難とされている複合動詞 (「動詞連用形+動詞」) の指導が日本語教科書ではどの程度偶発学習に頼っているかを調査し、限られた授業時間内に偶発的に学習者が触れる複合動詞を系統立てて教えるために日本語教員にとって必要な知識について考察する。影山 (2013) は、複合動詞を統語的 (アスペクト的) なものと語彙的 (アスペクト的又は主題関係的) なものの3種類に分類した。複合動詞は、その複雑な下位分類のため (白2005)、初中級で導入されるにも関わらず上級学習者にとっても習得が難しいとされているが (森田1977, 松田2004, 陳2007)、教科書での説明が十分ではないとの指摘もある (陳2001, 志賀2010)。そこで、教科書で複合動詞がどう扱われているかを調べたところ、1) ある統語的複合動詞 (例「～始める」) は文法として教えられているが、2) 別の統語的複合動詞 (例「～合う」) は生産性があるにも関わらず別個の語彙として導入されており、さらに3) 語彙的複合動詞はある程度類推可能なものも含めて語彙として挙げられていた。つまり、多くの複合動詞は語彙として偶発的に教えられていることが分かった。本研究では、国立国語研究所『複合動詞レキシコン』データベースの分析と影山 (2013) の分類を基に、教師がこの偶発的学習の機会を有効活用するための必要な知識として、生産性の高い統語的複合動詞、一つの語彙として覚えるべき語彙的複合動詞、そして、その中間に位置するある程度の意味の類推が可能な語彙的複合動詞の区別を理解することが必要であると提案し、偶発的学習であってもどのような指導が可能であるかを考察する。

「筆記試験からパフォーマンステストへ? 日本語初級レベルにおける比較調査と学習への波及効果」 (From traditional to performance-based assessment: Comparison at the beginning level and washback effects on learning) Namiko Uchida, Purdue University

現在、多くの言語教育の現場では、コミュニケーションな教授法を取り入れたカリキュラムが実施されている。しかし、評価方法では穴埋め式の文法問題や、「～の場合に何と言いますか。正しいと思うものをa, b, c から選びなさい。」のような選択問題が頻繁に見られる。仮にこの選択問題に正答できたとしても実際の場面で使えるとは限らないし、正確に発音できるかすらわからない。このような点に疑問を持ち、よりコース目標 (コミュニケーションな運用能力の育成) との整合性を高めるためにコミュニケーションな言語運用能力を測ることを狙ったパフォーマンスベースのテスト (以下PBT) を実施した。本発表は学期に行われる各課の試験を従来の筆記試験からSpeak Everywhereを使用したPBTに完全に切り替える試みについて報告するものである。また、学期末試験の終了後に、学習者に向けた意識調査アンケートを実施することにより、学習者に与える達成感や公平性、学習習慣の変化を分析し、プラス効果があったかどうかを検証する。アンケートの内容は?学習者の学習目標、?従来の筆記試験とPBTとの対比、?学習習慣の変化の三つで構成されている。例として、どちらのテストを好むか、どちらのテストがやる気を促すか、どちらのテストが学習者の学習目的に合っているかなどがある。PBTでは口頭運用能力を高める目的で筆記試験では測りづらいスピーキングを多く取り入れた。PBTによる評価が学習に及ぼす波及効果とそのテストの表面的妥当性を検証するとともに、このテストを実施した際の教師側の意見等も合わせて報告する。

「日本語学習者同士による訂正フィードバックの推進とその効果」 (The effect of explicit instruction of error correction techniques among learners of Japanese as a foreign language) Nobuaki Takahashi, Elizabethtown College

本研究は、言語教師により使用されている様々な訂正フィードバックを学習者に明示的に提示し、学習者間のペアワークにおける言語的誤りの訂正を推進することによる効果を検証する。

フォーカスオンフォームの枠組みの中で、教師による訂正については様々な研究結果が報告されているが、学習者同士のコミュニケーションにおいては、未だ言語活動の描写を目的とした研究がほとんどである (Mackey, Oliver, & Leeman, 2003等)。また、学習者間では教師に比べて訂正率が著しく低いことも指摘されている (Takahashi, 2003)。

現在主流のコミュニケーションアプローチの中では、学習者主体のインターアクションの増加に伴い、学習者同士の訂正率を高めること、与えられた訂正フィードバックを正しく認識することが必要になるだろう。

本研究は、日本語学習者の教室活動の中で、訂正フィードバックについての知識や練習をした学習者とそうでない学習者とで、ペアワーク内における誤りの訂正率を検証した。

様々な訂正手法を学んだ学習者は、試行錯誤を経て、特定の訂正フィードバックを与えるようになる傾向があった。また、双方が訂正手法についての知識を有しているペアは、そうでないペアに比べて、誤りに対する訂正率、与えられた訂正に対する自己訂正率ともに高かった。

言語形式に注意を向けすぎることにより意味交渉に支障を来すという状況は避けねばならないが、学習者同士が教師の役割を担うことも効果的である。相手の誤りの訂正というFace Threatening Act(FTA)を、学習者間の社会的文化的な摩擦を生むこと無く行うため、学習者への明示的な訂正フィードバック手法の提示は、教師が常に介入できない複数の学習者同士のインターアクションにおける一助になるのではないだろうか。

SESSION 1-D: LANGUAGE AND CULTURE / PROFESSIONAL DEVELOPMENT SIG PAPER [MISSISSIPPI ROOM]

Chair: Yasuo Uotate, University of Florida

「第三言語としての日本語：学習者は日本語音声をどのように捉えているのか」(How the L3 learner of Japanese recognizes special sounds: Long vowel, small tsu, n-sound, and voiced sounds)

Harumi Miyake, Emory University

ヨーロッパではもちろん、アメリカでも第二言語習得 (L2) と第三言語習得 (L3) の違いは数多く研究されているが、学習者の頭の中で音声はどのように処理され、日本語学習にどのように影響を及ぼしているのかといった研究があまりなされていないように見受けられる。L2影響は、学習者がL2を習得または学習した時期によって異なることが予想されることはもちろん聞き取り、そして発音に及ぼす影響が、第一言語 (L1) 及びL2によって異なることが予想される。本研究はL3として日本語を学習する初級学習者14人を対象に特殊音・濁音の聞き取り・発音テストを行い、その誤用・正用調査を行った。

特殊音・濁音の誤用研究は数多くされており、学習者の母語に着目した研究から特殊音・濁音そのものの有標性に焦点を当てたもの、テキストや学習環境の影響に注目したものまで幅広くなされている。本研究で取り上げる学習者のL2の影響の有無も学習者の日本語習得に何らかの影響を及ぼしているということは十分に考えられる。

また、この研究の参加者が所属するエモリー大学では、年々アジア圏からの留学生の数が増えており、画一化したコースやリピーターなどの音声指導では学習者の多様性に対応することが難しいという現状がある。よって、学習者の個々の差異を考慮した指導をすることが望ましいと思われる。留学生の増加はエモリー大学のみならず、多くの大学で起こっている現象であり、L3として日本語を学ぶ学生がこれからも増加すると十分にいえるだろう。

このような背景を踏まえて、今回の発表では韓国・中国からの留学生を対象とし、学生の母語・第二言語の学習歴・日本語学習歴の3つの要因から特殊音・濁音の聞き取り及び発音テストを行った結果を発表したい。

“The use of Japanese sound symbolism in contemporary Japanese comics”

Shigeru Suzuki, Baruch College, City University of New York

This paper discusses the various functions of Japanese sound symbolism such as onomatopoeias or mimetic words used in Japanese comics known as manga. As several comics critics and scholars have pointed out, the use of sound-symbolic words prevalent in Japanese comics than in American comics (Schodt 1987; Natsume and Takekuma 1997; Petersen 2009). Some might dispute that such a comparison is arbitrary or (over-)generalized when considering the wide range of comics produced in both countries. And yet, it is still safe to say that Japanese cartoonists have the advantage of employing Japanese sound-symbolic words in their comics due in major part to a copious inventory of onomatopoeic words and mimetics existing in the language. The Japanese language possesses rich vocabulary of sound-symbolic words that represent not only actual sounds (onomatopoeias) but also conditions, movements, and emotions (mimetic words). Japanese cartoonists effectively employ these linguistic symbols in order to produce acoustic and motion effects in the soundless, non-kinetic medium of comics. My presentation first examines several different ways in which Japanese comics creators utilize Japanese sound-symbolic words to enhance their comics expressions. Then, my paper discusses how Japanese postwar manga have generated new sound-symbolic words, which in turn contributed to the Japanese language as well. As a whole, my argument is that Japanese comics are one of the fertile sites in which new sound-symbolic words have been constantly invented, accumulated, and reconfigured as the product of an ongoing competition with other contemporary popular audio-visual media such as film, television, and other electronic media.

「初級レベルにおける文化ポートフォリオの試み」(Cultural portfolios at the beginning level)

Tomoko Hoogenboom, University of Maryland, Baltimore County

本発表では、言語と同時に文化を初級のレベルから取り入れた授業の試みについて報告し、学習者の母国語を媒体としながらも文化習得を外国語教育の早い段階から取り入れる必要性について論じる。細川(1997)やマコナキー(2011)などの研究者が言語学習者の母国語の言語文化と目標言語の文化を比較し分析することの必要性を述べている。これはACTFLで設定されている5Cに沿ったものであるが、使用語彙や文法項目が限られている初級学習者にとって、日本語のみを媒体としての文化習得には限りがあった。本発表では、Schulz (2007)をもとにした文化ポートフォリオを取り入れた受講二学期目の授業での文化学習の試みを報告する。学習者は、一学期目に地理や学習者の文化(C1)と日本文化(C2)に関するステレオタイプを主としたポートフォリオを作成しており、二学期目ではさらに文化の相違点が存在する理由を考える能力を身

につけることに焦点をおいた。テーマには、1) ある言葉が、それぞれの言語や文化でどのような意味合いを持っているのか、2) 同じ事象を二つの国のメディアがどのように報道しているのか、3) ある状況において異文化間の誤解がなぜ起こったのかなどが含まれていた。学習者が英語で意見をまとめ提出した後、授業でいくつかの意見を紹介し、全体での話し合いの場をもうけた。その結果、日本文化だけでなく、学習者自身の文化を省察する機会が与えられ、日本文化との相違についてより深く考えることができるようになった。今回の試みで初級学習者でも母国語を媒体とすることにより、文化の相違を深く考察でき言語習得とあわせ文化的な意味合いの理解も促せることがわかった。

「フロリダ日本語教師会とメンバーの成長：アーティキュレーション・プロジェクトを通して」(State-level articulation projects: Professional development for the Association of Florida Teachers of Japanese)
Yasuo Uotate, University of Florida; Mako Nozu, University of South Florida; Eiko Williams, University of Miami;
Soichiro Motohashi, University of South Florida

会員数30名程度の州レベルの日本語教師会はどのようにすれば、教師間の連携を強めたり専門性を高めたりしつつ、組織の活性化を図ることができるだろうか。本発表は、フロリダ日本語教師会(AFTJ)のメンバーが協働的に行っている日本語教育アーティキュレーション活動と、それらの活動がどのように個人の教師に影響を与えているかを経過報告としてまとめ、どのようにすれば今後更に活動を広げ教師会を発展させていけるかということを議論するものである。日本語教育グローバル・アーティキュレーション・プロジェクト (J-GAP) 活動を広げる事業の一環として、2014年8月にフロリダ州オーランド市において、AFTJの会員を対象にワークショップが行われた。参加者はJFスタンダード、みんなのCan-doサイトを活用したアーティキュレーションについて学び、その後六つの異なる教育機関に属する、ティーチングアシスタントをしている大学院生を含む7名が四つのプロジェクトを開始。本発表は中でも以下の三つ(1) Can-Do Statements協働作成を通してプログラム間のアーティキュレーションを図るプロジェクト、2) 「なんでも相談室・勉強会」に日本語教師の実践的課題を持ち寄り、その話し合いの中からアーティキュレーションを追求するプロジェクト、3) プレースメントテスト実施の実態把握から始めるアーティキュレーション・プロジェクト)に焦点を当てる。これらのプロジェクトを進める中で教師達は、お互いのことを知り、連帯感を高めている。知識や経験から学んだことを共有し、対話を図る場ができたことで、互いから学び合い、個人の内省を深められる、より実践的でボトムアップ型のプロフェッショナル・デベロップメントへと繋がっている。

SESSION 1-E: AP JAPANESE SIG PANEL [COLORADO ROOM]

Chair: Yoshiko Mori, Georgetown University

Panel Title: 「AP Japanese Language and Culture の課題と将来性」 (AP Japanese Language and Culture: Issues and Perspectives)

2006-7年にAP Japanese Language and Culture (以後、AP Japanese)が導入されてから、毎年二千人前後の高校生がAP Japaneseの試験を受けており、受験者数は緩やかではあるが着実に伸びている。しかし、高校関係者に比べ、大学の日本語教育関係者間でのAP Japaneseに関する議論はさほど盛んではない。また、最近のカレッジボードの調査(2013)でも、AP教科の中で、AP Japaneseの単位認定率が最も低いという結果が出た。これは、大学の日本語教育におけるAP Japaneseの意義に対する認識がまだ低いということを示唆している。本パネルは、大学関係者のAP Japaneseに対する認識を高めるために、4人のパネリストが様々な観点から問題を提起し、今後の方向性と課題を考察する。まず、発表1では、AP Japaneseの試験がどのような観点から作成され、どのように行われ、どのように採点されるのかを概説する。発表2では、2014年度のAP Japaneseの試験結果を概観し、問題分析を試みる。さらに、試験準備をすることが3つのコミュニケーション力(interpersonal, interpretive, presentational communication skills)の向上にどう結びつくかを考察する。発表3では、実際に高校でAP Japaneseを取った学生がどう感じたか、そして、大学の日本語教育に何を期待するかをアンケートとインタビューの結果を踏まえて考察する。発表4では、MOOC(Massive Open Online Course)が日本語教育にどう役立つのか、その意義と可能性を考察し、AP Japaneseとの関連性を探る。

“Assessing AP Japanese learners: Construction, administration, and scoring of the AP Japanese Language and Culture examination”

Kimberly Jones, University of Arizona

The AP Japanese Language and Culture examination is typically taken as the culmination of a rigorous course of study that enables high school students to cover material more typically covered in beginning and intermediate college-level Japanese courses. This presentation explores the processes involved in constructing, administering, and scoring the exam. An increased understanding of how AP Japanese learners are assessed via this exam can benefit both teachers and administrators in high schools currently offering, or considering offering, an AP Japanese course, and college faculty who are curious about the capabilities of high-scoring AP Japanese test takers and how the AP Japanese course articulates with courses at their institutions.

“2014 AP Japanese Language and Culture Exam Report”

Motoko Tabuse, Eastern Michigan University

The presenter will share the results of the 2014 AP Japanese Language and Culture Exam. The most challenging exam topics and questions for high school students will be identified, discussed, and analyzed, and their instructional implications will be defined. The presenter will compare the challenging exam tasks with those that high school students found most demanding. The presenter will also suggest some recommendations to deepen understanding of the underlying principles of the three

modes of communication as exemplified by the test items, and also inform the audience of recommendations for high school teachers to develop strategies aimed at helping their students enhance their interpersonal, interpretive, and presentational communication skills.

「AP Japanese を取った学生は大学の日本語教育に何を期待するか」 (What AP Japanese students expect from Japanese language instruction at the college level)

Yoshiko Mori, Georgetown University

AP Japaneseの導入により、高校生の目的意識と日本語力が高まり、大学入学時から中上級の日本語コースに入る学生が増えている。また、卒業後、日本関係の仕事を希望する学生は多く、そのような学生は社会で通用する日本語力を身につけたいと考えている。これに伴い、大学の日本語プログラムは、授業内容、中上級コースの充実など、学力と学習意欲の高い学生のニーズに答えるカリキュラムを提供する必要性に迫られている。今後の大学の日本語教育のあり方を探るために、高校でAP Japaneseを取った大学生の認識と期待を調べた。東海岸の私立大学で日本語コースに在籍する84人にアンケート調査を行ったところ、11人がAP Japaneseを取ったと答えた。その11人に追跡調査を行ったところ、次のようなことが明らかになった。(1) 11人中6人が片親あるいは両親が日本語を話す継承語学習者、残り半分が高校時代に6週間から8ヶ月の留学経験のある学生で、AP Japaneseの学生は高い日本語力を身につけて大学に入学して来る。(2) 継承語学習者はAP Japaneseを易しいと捉えているのに対し、それ以外の学生は言語知識や文化など多くのことを学んだと答えた。(3) 全員が大学では実践に役立つ高度な日本語力を学びたいと考えており、政治経済、ビジネス、文学、日本語の構造など、専門分野を日本語で学ぶコースを希望している。(4) 全員が卒業後日本に貢献できる仕事をしたいと考えている。これらの結果から、AP Japaneseは高い日本語力を身につける土台を着実に作り上げており、大学はさらに高い言語力と専門知識を身につけた人材を社会に送り出す使命を担っていることが明らかになった。人材育成という観点から、大学の日本語教育はどう貢献できるか、その課題と方向性を考察する。

“AP-level Japanese MOOC: Shall we dance?”

Takako Aikawa, Massachusetts Institute of Technology

The goal of the presentation is to raise the awareness of the necessity of developing Japanese MOOC (Massive Open Online Course) courses targeted for intended AP test takers while describing types of preparations required for a successful delivery of such MOOC courses. First, the presenter will share information about the edX (<https://www.edx.org/>) High School Initiative, which addresses the need to enhance a smooth transition from high school to college for intended AP test takers. Second, the presenter will introduce some of the AP MOOC courses available via edX. Third, the presenter will entertain the idea of developing AP-level Japanese MOOC courses and discuss what needs to be done to develop such courses. At that time, the presenter will emphasize the importance of collaboration between high school teachers and college teachers, and propose some concrete logistics to deliver successful AP-level Japanese MOOC courses. Finally, the presenter will introduce a pilot project that Massachusetts Institute of Technology has been working on in collaboration with an edX partner company that provides a platform technology for MOOC.

SESSION 1-F: LINGUISTICS PAPERS / CLASSICAL JAPANESE SIG PAPER [ARKANSAS ROOM]

Chair: Pana Barova-Ozcan, Independent scholar

“Terms of reference in online community: Words for ‘husband’ used by young Japanese wives on Facebook”

Hiromi Onishi, Grinnell College

This study examines various words used by young Japanese wives when referring to their spouses in their Facebook posts. In Japanese, there are father terms, such as *papa* ‘daddy’ and *otoo-san* ‘father’, and husband terms, such as *danna* and *shujin* ‘husband’, as words of reference for a husband who is also the father of a child. The current observation showed that young Japanese wives have a large repertoire of terms that they can use when referring to their spouses. In general, it was found that Japanese wives alternated between husband terms and father terms depending on the viewpoint used or the content of the post. As expected, when the viewpoint of the child was used, the wives always used a father term to refer to their husbands. Father terms, rather than husband terms, were also used when the content does not involve the child’s viewpoint but when it nevertheless involves family-related events. What was particularly interesting was that husband terms were more likely to be used when the content of the post concerned a romantic event, such as the Valentine’s Day or the wife’s birthday. What makes this study especially interesting is the type of data it examines. Japanese digital writing often exhibits very interesting features. Because these posts were entered digitally on the Internet, there were spelling features that would not have been utilized if the words had been written by hand. Overall, this study aims to show the diversity in the words of reference used in digital communications, and to encourage further study into various contexts and different types of writing.

“Image-schemas in Cognitive Linguistics and Verticality of Space in Japanese and English”

Tae Kunisawa, University of New Mexico

The purpose of this study is to analyze the reconceptualization of lexico-grammar of linguistic category in vertical space from Japanese to that of English with image-schemas. Talking about space substantially differs among cultures, despite the fact that physical space is the same everywhere (Bowerman, 1996b; Levinson, 1992a, 1992b, 1997, 2003a, 2003b; Pederson et al. 1998; Levinson & Wilkinson, 2006a, 2006b). Primary differences between Japanese and English regarding verticality of space are: 1) English speakers describe vertical space with two categories regarding contact vs. no contact. Conversely, Japanese speakers employ a single category to describe it: 2) Prepositions are used to describe vertical space in English. However, Japanese employ different word classes from those of English, including (1) relational noun=*ue* +locative *ni* or locative *de* (equivalent to

on, over and above), (2) locative genitive+nominal= no-tokoro (equivalent to at a place of), (3) relational noun+ locative genitive+nominal= ue-no-tokoro (equivalent to at a place of on, over and above), (4) ellipses+locative ni, or locative de (equivalent to at a place of). Despite the fact that there has been much interest in the challenges faced by L2 speakers of spatial language (Coventry et al. 2012), few studies involve L2 spatial language learning today. Studies indicate considerable difficulties in learning spatial prepositions for FL learners (e.g. Ijaz 1986, Munnich and Landau 2010, Coventry 2012). The theoretical background of this study is image schemas in cognitive linguistics. Based on studies done by Johnson (1987), Lakoff and Turner (1989) and, Clauser and Croft (1999) suggest an inventory of image schema. This study focuses on SPACE UP-DOWN in the inventory, which is considered as the most rational classification of the image schema today. Conclusion: the analyses of the reconceptualization of spatial verticality in Japanese and English with image schemas reveal the fundamental differences between English and Japanese regarding lexico-grammar.

“The Origins and Grammaticalization of the Classical Japanese *izen-kei*”

Alexander Ratte, Ohio State University

In analyses of Classical Japanese grammar, the *izen-kei* (IZ) is often closely associated with the *mizen-kei* (MZ), even though the shape of the *izen-kei* appears much more closely related to the *rentai-kei* (RT) than to the *mizen-kei*, which we can see in the paradigms of verbs such as *su* ‘to do’: MZ: *se* IZ: *sure* RT: *suru*. This paper proposes that the *izen-kei* derives directly from a verbal nominalization of the shape *ROOT-ora > *ROOT-ura that has been re-predicated with the inflection -i (here with quasi-copular function) to give *ROOT-ura-i > ROOT-ure. Evidence is to be found in a set of lexicalized nominalizations created by an apparent verb suffix *-ura: e.g. *mak-* ‘to wrap,’ *makura* ‘pillow’; *mas-* ‘to increase, be strong,’ *masura* ‘strong one’. The phonological parallels between *izen-kei* and *rentai-kei* can further be explained by analyzing the IZ base *-ura as a derivation from the proto-Japanese adnominal suffix *-or plus the archaic nominalizer *-a to produce *ROOT-or-a, which underwent mid-vowel raising to give *ROOT-ura (Frellesvig & Whitman, 2008). Re-predication of this *ROOT-ura structure with -i then became grammaticalized as the *izen-kei*. Provisional (realis) interpretations of *izen-kei* conditionals thus derive from its origin as a predicate nominal presupposing a situation as fact (similar to Whitman, 2004), and the exclamatory meaning of *izen-kei* reflects the cross-linguistic use of nominalizations in exclamation. Crucially, identifying *-ura that attached to yodan verbs provides key evidence for what scholars have long suspected, that originally all verbs formed their *izen-kei* and *rentai-kei* with *-ur-, and that it is the yodan verbs that have lost *-ur- in their IZ / RT forms (Whitman, 1990). This paper demonstrates that the Classical *izen-kei* is not a true proto-Japanese conjugation, and shows that understanding the origins of Japanese grammar requires looking beyond the traditional *katsuyou-kei* analysis.

“Function of the auxiliary verbal suffixes *-ki* and *-keri* in Heian women’s diaries, with a special focus on the *Sarashina diary*”

Pana Barova-Ozcan, Independent scholar

This presentation will discuss the use and function of the auxiliary verbal suffixes for past tense in classical Japanese, *-ki* and *-keri*, in Heian women’s diaries. I will focus in more detail on the function of *-ki* and *-keri* in the *Sarashina diary*. The *Sarashina diary* recounts the entire life of the author. It is written post-factum, which presupposes that events would be recounted in the past tense. However, the tense used throughout the diary is the present, with markers of grammatical past, *-ki* and *-keri*, being used only rarely. I will discuss the range of modal meanings that *-ki*, and especially *-keri*, provide to the narrative, and their significance for the discourse of the diary. I will argue that rather than marking tense, the main function of *-ki* and *-keri* in the *Sarashina diary* is to create a complex and shifting narrative perspective, contributing to the intricate and subtle structuring of the narrative discourse.

10:50 a.m.–12:30 p.m. — Session 2

SESSION 2-A: PEDAGOGY PAPERS [HURON ROOM]

Chair: Yuko Kageyama-Hunt, Harvard University

“Literary and cultural ‘theory’ in undergraduate Japanese studies”

Anri Yasuda, George Washington University

This paper considers the relevance of ‘theory’ in the curricula of undergraduate students studying Japanese culture and literature in American university settings. By ‘theory’, I refer to major critical perspectives of the twentieth century onwards such as structuralism, post-structuralism, psychoanalytic approaches, gender theory, post-colonialism, translation studies, and the like, which scholars across humanities disciplines - including Japanese Studies - have come to regularly employ in their research. There has been much academic discussion on how and whether studying these various metacritical paradigms helps college students gain deeper comprehension of new texts, or if they cloud students’ appreciation of the primary material under analysis.

In this paper I examine how American students’ engagement with Japanese texts, in translation or in the original language, might be enhanced through exposure to the interpretive frameworks of literary and cultural theories. Drawing on my own experiences from teaching a ‘theory’ seminar for Japanese language and literature majors, I discuss how the students identified linkages, as well as disjunctions, between select Japanese literary works and cultural productions, and the Western-based literary and cultural theories we read. Rather than forcibly applying different ‘-isms’ to Japanese texts that do not necessarily fit these conceptual frames, students were able to conceive of their own unique responses in light of the multiple possible discourses, and also articulate how these ‘theories’ might be challenged or refined. I also note how the students analyzed works of secondary scholarship on Japan that utilize specific literary and cultural theories. Through this presentation, I hope to invite

fellow educators to a conversation about the aims of Japanese literature and culture courses in contemporary academic environments that emphasize cross-disciplinary, humanistic connections, as well as the particularities of different cultural and discursive perspectives.

「ポップカルチャーを教材として活用した初中級日本語コースの実践報告」(Enhancing content learning in late-beginning level Japanese language courses through popular culture)

Yoshiro Hanai, University of Wisconsin, Oshkosh

近年、多くの日本語学習者の学習動機付けに日本のポップカルチャーへの興味や関心が強く関わっていることは明らかである (Fukunaga, 2006)。このような内発的動機付けに繋がる文化的興味は外国語学習の成功に極めて重要であり、授業を提供する者がポップカルチャーを教材として授業に取り入れる意義は大きいと言える。しかし、一方で、ポップカルチャーを学術的に教えることへの難しさが指摘されていることも事実である (外務省海外交流審議会, 2006)。

本発表では、ポップカルチャーを主教材として活用したコンテンツベースの日本語コースの実践報告と履修者へのアンケート結果を通して、日本語授業でのポップカルチャーの活用について議論する。この授業では、ポップカルチャーを広義に解釈し (外務省ポップカルチャー専門部会, 2006)、漫画やアニメだけでなく、浮世絵や歌、踊りなども取り上げ、その発展の歴史や重要性について注目しながら日本語学習を進める。受講対象者は初級教科書後半以上の日本語を学習中の学習者で、学習の早期段階から興味がある内容に重点がおかれた学習が出来るため、学習者が学習動機を高く保てるという利点を持つ。また、言語レベルのコントロールやデジタルテキストの活用により、学習者には、初級、または中級前半レベルの日本語授業で通常提供される以上の量の読解が課される。インプット量の欠如が問題になるこのレベルにおいて (Grabe, 2002)、この点は大変重要である。更に、漫画のキャラクターの描き方や有名な歌や踊りの導入など、学習意欲維持の更なる向上を狙って開発されたポップカルチャーならではの教材も紹介する。

「留学中の課外行動パターンと言語能力上達の関連性の分析に基づく留学の意義考察と留学指導方法への提言」(Study abroad: Understanding the significance of language activities outside of the classroom)

Miyuki Yamamoto, University of Massachusetts, Boston; Masahiro Hara, Truman State University

国際化が進み、留学が大学教育の一環としての重要性を増す今日、日本語教育者としても、留学の機会を広め、質を高めるのは急務である。そこで課題となるのは、留学の機会を最大限に生かし、日本語上達を図るための日本語教育者としての指導方法である。この課題を考慮し留学プログラムの教授をしていた際に目に留まったのは、学生の留学の目的やモチベーションにより、留学中の教室外での日本語運用の種類と量に違いが出ていることであつた。この違いにより言語能力の上達にも差が出るのではないかと仮説を立てた。また、その上達差を分析、理解することにより、留学の意義や留学中の過ごし方をより効果的に指導できるのではないかと考えた。本研究では、ミシガン州立大学連合日本センターで行われる、9週間の夏季日本語集中講座の初級・中級参加者 (49名) の授業外の行動を2013年・14年の二夏に渡り調査した。この調査は、授業や授業に関連する勉強以外で、学生が日本語の四技能を使うことにどの程度の時間を費やしているか毎週アンケートをとり、各学生の教室外日本語運用パターンとそれに伴う特定の日本語の技能の上達の関連性を調べることを目的とした。本発表では、データ分析により、留学期間中の教室外での過ごし方と、学生の文法力や会話力の上達の関連性を示す。更に、留学前の学生への指導方法として1) 実証データを留学前の学生に提示することで、留学の効果を説明できる、2) 学生の留学目的を明確にさせ、留学中の課外活動についての計画を立てさせることにより、より効果的な留学経験を促すことができることを提案する。最後に、今後の留学における課題を提言する。

「3C's 達成・協働学習・自律学習促進を目指したプロジェクト例」(Three projects to enhance the 3C's, collaborative learning, and learner autonomy: Debate, OLIVE, and WEIV for Business Japanese)

Yuko Kageyama-Hunt, Ikue Shingu, and Takuma Miura, Harvard University

近年日本語教育の指標として、3c's(連携、比較、コミュニティ)を取り入れた内容重視の教育や、3領域×3能力+3連携によるコミュニケーション能力の獲得が掲げられている。また、社会文化理論の観点から、文化理解と語学力の向上のためにテクノロジーを利用した参加型・協働学習と自律学習が効果的であると考えられる。本発表では、以上の点を鑑み当プログラムが実施してきた三つのプロジェクトの実践例を報告する。第一に初級クラスでのディベート活動の成果について報告する。ディベートは一般的に中・上級レベルで活用されるが、初級でも学習した表現を総合的に駆使する談話運用能力の育成に効果的であり、学習者間の相互交渉や協働学習の機会を得ることができ、またサービラーニングとの連携も可能になることを説明する。第二に、初級クラス用のOLIVE (Online Interactive Video Exercise)について説明する。OLIVEを通じ、学習者はビデオポスティングで口頭練習を自律的に行うことができ、また創造力を駆使して制作したビデオをウェブサイトで他の学習者と共有してピアリスポンスを得る機会が与えられるため、学習意欲を高められる。第三に、日本で企業研修をする学習者用に開発したWEIV (Web Enabled Interactive Video) for Business Japaneseについて述べる。WEIVは、ビジネスの場面・機能シラバスに基づいて作られたオンラインビデオ教材で、学習者は携帯機器にダウンロードしたWEIVを用いてビジネス日本語の自律学習ができるという利点がある。本発表では開発手順と使用方法を説明する。

SESSION 2-B: PEDAGOGY PANEL [MICHIGAN ROOM]

Chair: Kazumi Hatasa, Purdue University

Panel Title: 「自作 GPS ゲームの日本語教育での利用と実践報告」 (Applications of Self-made GPS Games by ARIS in Japanese Language Instruction)

ARISはウィスコンシン大学が開発し無料公開しているGPSゲームエディタである。GPSゲームとは拡張現実の利用方法の一つで、スマホの位置情報を利用して、プレーヤが実際に移動して、進行していくように設計されているゲームである。スマホを持って、観光ポイントなどあらかじめ指定された地点を訪ねることで完成するスタンプラリーも単純なGPSゲームと言える。各地点でプレーヤがメモを書いたり、音声メモやビデオメモを残すこともできる。ARISはこのようなゲームを教育用に無料で開発できる環境を提供している。 (<http://arisgames.org>)

この環境を使うと様々な学習外活動が可能になる。日本国内の留学生のための生活拠点の紹介ゲーム、観光名所巡りなどが簡単に作れる。米国内のキャンパスの建物や場所を利用したゲームに言語タスクを組み込むこともできる。プレーヤ間会話を日本語を行わせることもできる。また、Quick Travelという機能を使えば、海外からでも日本のゲームに参加することもできる。このように、教室外での活動を大幅に豊かにする可能性を持った学習環境なのである。

ミドルベリー大学夏期日本語学校では2014年の夏にこの環境を利用して初級、中級、上級の三つのレベルでゲームを開発、試用した。上級は文学作品（黒い雨と武士道）の読解の前作業のためのゲームを制作し、実践した。中級ではミドルベリーの町を紹介するゲームのコンテンツを学生に作らせた。そして、初級ではキャンパスを使ったスカベンジャーハントを制作し、実践した。本発表では、それぞれの取り組みを紹介し、ゲームに対する学生アンケート調査の結果を報告する。

「ARIS の概要」 (Overview of ARIS)

Shinji Shimoura, Purdue University

ARISはブラウザ上で稼働するゲームエディタとiOSデバイス用のアプリの二つから構成されている。ゲーム開発者はエディタを使ってゲームを作り、ARISのサーバー上に無料で保存、維持することができる。容量が大きいビデオはYouTubeにアップし、リンクをはって利用することができる。プレーヤーは無料のARISアプリをiPhoneやiPadにダウンロードする。ARISアプリを開き、ゲームを選んでプレーする。ゲームエディタの使い方を学習する必要はあるが、コンピュータの知識を必要とするものではない。本発表ではゲームエディタとARISアプリの概要と利用方法を説明する。

「ARISを使った初級日本語デジタルスカベンジャー・ハント」 (Creating and using a digital scavenger hunt for beginning Japanese with ARIS)

Shino Hayashi, Washington University in St. Louis; Wakana Maekawa, Harvard University; Sachiko Kondo, Oberlin College; Junko Yamashita, Hiroshima University

学習者の多様性に応じた効果的なCALL教材開発の重要性が提唱されて久しい(山田, 2001)。学習者の興味を惹きつけ学習意欲を高める試みの一つとして近年ではゲームの要素を含んだ活動も多く用いられており、学習者の主体性の向上が期待されている(Reinhardt & Sykes, 2014)。初級クラスでは、スカベンジャー・ハントをプログラム最後の総復習として実施してきた。スカベンジャー・ハントとは、参加者が指示に従って場所を移動しながら様々な課題をこなすゲームである。これまで課題の提示は紙媒体に頼っていたが、ARISの使用により課題の提示方法のみならず学習者の活動の幅も広げられる可能性が出てきた。本発表ではARISを利用したスカベンジャー・ハントについて報告する。学習者がモバイル端末にARISをインストールしてゲームを始めると、次の場所への移動の指示が現れる。そこに移動すると学生の位置情報が読み込まれ、画面に課題が表示される。課題をこなして次の場所に移動すると、再び位置情報が認識され次の課題が現れる。学習者は寮や図書館、バレーボールコート等、キャンパス全体を移動しながら与えられた課題に取り組みゴールを目指す。課題は、模擬レストランでの注文、携帯電話での会話、施設の営業時間やバスの時刻の報告等、現実的なものを取り入れた。課題は全て日本語で与え、文字情報や音声、画像等も使用した。ARISを利用することで活動内容や活動範囲の多様化が実現した。学習者からの評価も高く、面白いアプリで使い方も簡単だった、このような広範囲に渡る活動には欠かせない等の意見が多く見られた。一方、端末を持っていない学生への配慮や、位置情報が読み取れない等の不具合への対策等が今後の課題である。

「中級日本語でのARISを使った作文活動」 (Applications of ARIS for writing in intermediate Japanese)

Mayumi Hirano, University of Nevada, Las Vegas; Yuta Mori, University of Michigan; Ai Sukegawa, Oberlin College; Megumu Tamura, Purdue University

近年、目的をもった意味のあるコミュニケーション活動の必要性が求められているが、作文活動を通して学習者が書いたものは、クラス内での発表に留まることが多い。そこで、GPSを利用したゲームが作成できる『ARIS』を使い、学習者の作文を実際の生活に役に立つ情報として利用する試みを行った。本発表では、その実践報告として、ミドルベリー大学夏期日本語学校の中級レベルで行った「次年度の学生へ贈る言葉」と題した作文と発表の活動について報告する。

今回の活動では、学習者がプログラム中に行った場所の中から1箇所を選び、次年度の学生に紹介するという課題を与えた。学習者は数人のグループで選んだ場所について、既習文法をできるだけ多く使いながら魅力あるメッセージを書き、録音し、写真と共に提出した。学生は、キャンパス内だけに留まらず、街のレストランや近郊の自然・観光スポットなど様々な場所を選んだ。提出された情報を教師が『ARIS』に入力し、「観光ガイド」を作成し、クラスで発表を行った。

通常の作文活動では、教師が読み手となり言語能力を測定することが主な目的となることが多いが、『ARIS』を利用することで、学習者が備えている知識を教室外の人に伝えようとするコミュニケーションの目的が達成できた。この「観光ガイド」は次年度の学生に実際に紹介する予定だが、今回の我々の実践は、今後、ACTFLのスタンダードにもある、

コミュニティーに向けて発信する言語活動としても広げられると考える。本発表では、教師側からの見解と学生の反応を基に、今年度の活動の成果と来年度以降の夏季日本語学校での課題、そして、他機関の通常講座への応用も示唆する。

「ARISを使った上級日本語の読解指導」 (Using ARIS for reading in advanced Japanese)

Satoru Ishikawa, Boston University; Mika Oidaira, Hiroshima University

近年タブレットを使った反転授業が注目されているが、言語教育でもマルチメディアを利用した指導は学習者の学習意欲を高める点において有効だと考えられている（李2009）。しかしながら、上級での読解では紙媒体のみに依存する傾向が強く、学習者にとり授業が単調になる傾向が強い（川村2007）。本発表では上級の読解でARISを採用し、学習者の学習意欲を高めながら行った読解指導について報告を行う。

ARISには、Google Maps上を仮想現実として歩き回るQuick Travel 機能がある。この機能を使い、1)読解のための授業外で行う予習、2)授業中に行う読解作業の2つのプログラムを作成し実践した。

1)では、「武士道」の著者新渡戸稲造の足跡を理解するため必要な人名や地名などの基礎知識をARISのGoogle Maps上に埋め込み、学習者がゲーム感覚で地図上の指定された場所を巡りながら情報を学習できるタスクを作成した。学習者は情報を見るだけでなく、ARISで得た情報をもとにARIS上の質問に答えて、タスクが完了する。又、質問の解答はARIS上で他の学習者に公開させた。

2)では、小説「黒い雨」を使い、小説に登場する場所とGoogle Mapsをリンクさせたプログラムを作成した。学習者が小説の舞台となる場所をARISのGoogle maps上で訪れると、その場所の写真や動画（文字情報と共に小説が音読されている動画）が始まるように設定されており、学習者は物語と共にGoogle Maps上を移動し小説を読み進む。

学習者からは文字だけでなく写真や地図を見ることで読解内容や物語の舞台がよりリアルに体験できた、質問に対する他の学習者の解答を見られて勉強になったなど肯定的な意見が見られた。一方、端末を使い慣れない学生への配慮など、今後の課題も残された。

SESSION 2-C: SECOND LANGUAGE ACQUISITION (SLA) PAPERS [OHIO ROOM]

Chair: Yasumasa Shigenaga, University of Oregon

“L2 comprehension of Japanese OSV sentences”

Yasumasa Shigenaga, University of Oregon

The present study investigated how Japanese sentences in Object-Subject-Verb (OSV) order are comprehended by speakers of Japanese as a second language (L2). Previous research has shown that native speakers of Japanese slow down at the second noun-phrase (NP2) position when they read OSV sentences, possibly due to reanalysis of the sentence structure during parsing. On the other hand, studies that examined L2 comprehension of Japanese OSV sentences are scarce, and it is not clear how such sentences are parsed by L2 speakers. Not only may this line of research help reveal the L2 comprehension of sentences in OSV word order, it might also provide insights into the similarities and/or differences between native and L2 parsing. Fifty-four L2 speakers and twenty native speakers of Japanese participated in the present study. The L2 participants were grouped into Advanced, High Intermediate, or Low Intermediate groups, based on their scores on a proficiency test. The participants read sentences on a computer, word by word, at their own pace (non-cumulative self-paced moving-window technique). The reading time of each phrase by each participant was recorded and analyzed. The results showed that the native speakers slowed down at the NP2 position, as found in previous research. On the other hand, the L2 groups, regardless of their proficiency level, did not indicate such slowdowns, suggesting that native and L2 sentence parsing may be qualitatively different. As for the influence of overall L2 proficiency on sentence processing, although the data from the Advanced group did not indicate slowdowns at the NP2 position, they did indicate slowdowns at other positions in OSV sentences, which suggests that the Advanced participants might have integrated the case-marker information more consistently than the lower-proficiency participants. Future research directions will also be discussed.

“Comprehension of scrambled sentences by L2 learners of Japanese”

Akiko Kashiwagi-Wood, Oakland University

Scrambling, non-canonical word order sentences, is one of the frequently discussed topics in Japanese language acquisition. The corpus study shows that frequency of scrambled ditransitive sentences is relatively high (Kondo & Yamashita, 2011). Japanese language textbooks, however, do not place high importance on exposing the second language (L2) learners to scrambled sentences. Additionally, previous research has shown that English native L2 Japanese learners, especially in lower proficiency level, rely heavily on word order cues (Sasaki, 1994). These findings indicate that L2 learners may have difficulty comprehending scrambled sentences. The current study investigates whether English native L2 learners of Japanese would exhibit comprehension of scrambled sentences without being explicitly taught.

Following Hara (2009), 3 types of Japanese scrambled sentences were used as the test sentences: (a) canonical subject-adverbial phrase-direct object-indirect object-verb, (b) short scrambling subject-adverbial phrase-indirect object-direct object-verb and (c) long scrambling subject-direct object-adverbial phrase-indirect object. The data from two tasks were used for the analysis: (a) an acceptability judgment task, and (b) a self-paced reading task with comprehension questions. The data of the latter task was collected within a larger study.

The result from the acceptability judgment task demonstrated that the L2 learners felt canonical condition the most acceptable, followed by the short scrambling, and then the long scrambling conditions. However, the analysis of the comprehension accuracy rates demonstrated the highest accuracy rates in the short scrambling, followed by the canonical and then the long scrambling conditions. A further look at the sentence reading patterns based on the reading times in comparison to the native control group's, suggest that the learners have distinctive reading patterns from the native speakers. The current

results indicate the discrepancy between the grammatical knowledge and actual on-line comprehension of scrambled sentences by L2 learners of Japanese.

“Becoming a conversationalist at the dinner table: A longitudinal study of a JFL learner living in foreign language housing”

Yumiko Matsunaga, University of Colorado, Boulder; **Junko Mori**, University of Wisconsin, Madison

Foreign language housing (FLH) has long been instituted at many colleges and universities in the U.S., with the intent of increasing students' exposure to a second language (L2) of their study. The systematic study of FLH activities and their impact on the residents' L2 learning, however, has been conducted only in recent years (e.g. Brown, et al., 2011; Martinsen, Baker, and Brown, 2011; Martinsen et al., 2010). While previous studies present a broad-brush view of FLH, exact details of FLH activities and their qualitative differences from classroom activities are yet to be investigated further. The current study contributes to this research agenda by providing a close analysis of a series of dinner table conversations held at a foreign language house situated in a Midwestern university residential hall in the mid-2000s. In order to uncover what kinds of observable practices might have contributed to the perceived linguistic gains, the current study undertakes a close analysis of a learner's participation in dinner table conversations. Our focal participant, a first-year Japanese student, Michael (pseudonym), is among the learners who were considered to have made significant strides in their ability to establish themselves as active interactants. Our analysis, informed by conversation analysis, focuses on how Michael initiated and sustained (or did not sustain) topical talk in three different sets of data videorecorded at two- to four-month intervals. It also examines how each occasion generated (or did not generate) opportunities for learning new vocabulary. Through the analysis of selected excerpts, we consider 1) how doing being a classroom learner differs from doing being a conversationalist in dinner table conversations; 2) how frequent hybrid use of L1 and L2, or what some researchers call “translanguaging” (e.g. Creese and Blackledge 2010; Garcia 2009), may indeed facilitate the development of interactional competence in this particular context.

「英語を母語とする日本語学習者の物語発話におけるトピック管理の発達」(The development of topic management in Japanese by English-speaking learners of Japanese)

Kazunori Suzuki, Bunkyo University; **Kaori Yamasaki**, Ochanomizu University

本研究では、英語を母語とする日本語学習者を対象に、日本語の物語発話でのトピック管理の発達過程を明らかにする。物語発話データは、Shibata (2000) がFrog, where are you? (Mayer, 1969) を用いて収集したものを使用した。データ分析には、Chaudron & Parker (1990) の理論的分析を利用し、「談話的有標性」の観点から分析を行う。談話構造中には、継続的登場（継続しているトピック）、既知の登場（再焦点化されるトピック）、新登場（新たに導入されるトピック）の3つの談話文脈がある。新登場では、新たな名詞句を導入するため最も有標とされており、「N（名詞）＋が」で導入するのが自然である。既知の登場では、一度トピックから外れた名詞句を再焦点化する必要がある、新登場の次に有標とされている。ここでは、「N＋は」で具現化する必要がある。継続的登場では、トピックが継続しているので、談話文脈上最も無標とされている。ここでは、ゼロ照応（音声的に具現化しないこと）が自然である。データ分析では、「ゼロ照応」、「N＋助詞欠落」、「N＋は」、「N＋が」の4点に着目した。その結果、以下の3点が明らかになった。(1) Low群は、どの文脈においても「N＋助詞欠落」を生成する傾向にあるが、High群になるとそれは大きく減少した。(2) 新登場のトピックを導入する際、Low群は「N＋助詞欠落」、「N＋は」、「N＋が」の3つを混同していたが、High群になると「N＋が」を適切に使用できた。(3) High群は「N＋が」を過剰に適用してしまう傾向にあり、新登場だけでなく既知の登場でもそれが多く観察された。以上より、トピック管理に関しては、日本語能力に応じた教授可能性があり、日本語教育の一端に貢献できると考える。

SESSION 2-D: PROFESSIONAL DEVELOPMENT SIG PANEL [MISSISSIPPI ROOM]

Chair: Sufumi So, George Mason University

Panel Title: 「J-GAP 4 年事業報告: 透明性、実現・持続可能性を求めたカリキュラムアーティキュレーションの新しい在り方」(The 4-year Work of J-GAP USA: A New Model of Curriculum Articulation in Search of Transparency, Practicality and Sustainability)

ここ数年「日本語教育におけるアーティキュレーションはどうあるべきか」といったマクロのレベルの考察がいくつか見られる(當作 2009, 2010, 2011, 2013; 磯山渡邊 2010)。これらの論考では、従来「アーティキュレーション事業」として優先的に考えられてきたトップダウンの連結・連携活動ではなく、学習の連続性確立に重きを置く意義が指摘されている。カリキュラムの内容や目標をプログラム間で画一化することを目指すアーティキュレーションではなく、カリキュラムの実行を支える教師の構え、教育に対する姿勢を見直し、それを他の教師と共有しながら、学習者の日本語学習の連続性促進に繋げて行くアプローチが認識されてきているように思う。では、この発想はどうやって教育活動として具体化させていけるのか。このパネルでは、その具体化案の一例として、J-GAP (Japanese Language Education Global Articulation Project)の一環で、米国バージニア州・メリーランド州を中心に2011年から4年間に渡って探索的にではあるが、計画的に行ってきたアーティキュレーション事業を、反省的実践家 (reflective practitioner; Schön 1983, 1987)の立場から、その概要、及び、歴史的、理論的背景、また、その中核を成す教師発信型アーティキュレーションプロジェクトの運営に関するノウハウ、そして、プロジェクトのインパクトや広がりを紹介し、最後に米国での日本語教育が今必要とするアーティキュレーションの在り方を問い直す。

「カリキュラムアーティキュレーションの推進活動とティーチャー ラーニング コミュニティ(TLC) の形成」
(Teacher engagement in the curriculum articulation effort and the formation of a teacher learning community (TLC))
Sufumi So, George Mason University

J-GAPは数カ国の各指定地区で日本語プログラム間のアーティキュレーション確立を目指して2011年に始まったグローバルスケールの事業である。米国ではバージニア州、メリーランド州を中心に活動を始め、プログラム間のアーティキュレーション推進のための持続可能なモデル構築を目指してきた。本発表では、同事業の概要を歴史的、理論的背景を含めて解説し、これまでの経過と成果、今後の可能性を独自性、汎用性、発展性の三つの視点から考察する。特筆に値するのは、本事業の中核をなす教師発信型アーティキュレーションプロジェクトによる日本語プログラム間のアーティキュレーション推進活動が、ティーチャー ラーニング コミュニティ(Teacher Learning Community: 以降、TLC)、つまり、少人数の教師がJF日本語教育スタンダードの一環として作成された「みんなのCan-doサイト」などの具体的で実践的かつ普遍的なツールを活用しながらティーチングに関して協働学習を行い、相互の結び付きを強め、教師としての成長を図っていくグループの形成を引き起こしたことである。J-GAPの一環として行われた10以上の教師発信型アーティキュレーションプロジェクトのうち、それなりの成果をもたらしたのは、参加教師間の対話活動から自然発生的にTLCが形成されていき、グループの教師一人ひとりが主体的に学び合い教え合う「学びの共同体」(佐藤 2006)の様相を呈していった。探索的アプローチの本事業から得られた知見には、プログラム間のアーティキュレーション推進だけではなく、教師教育の新しい在り方への示唆も多く秘められている。

「カリキュラムアーティキュレーション事業を実施する上でのノウハウと注意事項：実体験に基づいて」
(Technical know-how and tips for making curriculum articulation happen: An experiential account)
Mieko Kawai, University of Virginia

本発表は、J-GAP USA事業の運営面のノウハウを、反省的実践家の立場から紹介する。J-GAP統括責任者であるTohsakuの“Think globally, act locally”の指針のもと、J-GAP USAは事業実施地域の状況に適した、独自の4か年(当初は3か年)事業を計画した。事業全体のまとめ役として構成されたチームの高校・大学の教師5人のメンバーの役割は、事業の進展とともに流動的に変化し、事業の中核をなす教師発信型プロジェクト参加メンバー、合計約80名と関わり合いながら、複数の教師発信型プロジェクトを同時進行で支援してきた。長期事業の骨組みに不可欠な実務的な部分、例えば、助成金申請、経費管理、ワークショップの開催などに関する知見や課題の紹介とともに、初めて顔を合わせた教師同士が信頼関係を築き、カリキュラムアーティキュレーションという共通の目的意識を持つ協働作業者として繋がっていきけるようにサポートしていく際の注意点など、経験者だからこそ語れる体験的エピソードを交えつつ指摘する。特に、どの地域での活動にも有用だと思われる情報、例えば、事業の質的分析の手段として使ったフォーカスグループインタビューやケーススタディーインタビューの実施方法、考察事項を記述・言語化する手法やタイミング、学会や教師会での発表を教師発信型プロジェクトの内容報告とともに、内省・次期計画の場として捉え、小さな活動目標達成の連続を「実現・持続可能なアーティキュレーション」の柱とした点などを取り上げ、他地域でも展開可能なカリキュラムアーティキュレーション推進活動のモデルとして提示する。

「日本語教育のアーティキュレーション支援モデルの開発を教師発信型プロジェクト実践者の経験から考える」
(Implications of teacher-initiated project participants' experiences for building a new model of curriculum articulation)
Tomoko Marshall and Tomomi Sato, University of Virginia

本発表では、J-GAP USA事業の中核を成す教師発信型アーティキュレーションプロジェクト実践者の声をまとめ、実践者の経験に裏打ちされた新しいアーティキュレーション支援モデルを提案する。まずは、バージニア州で行われた、「みんなのCan-doサイト」を活用した高校-大学間のアーティキュレーションを図るプロジェクトの参加者が反省的実践家の立場から、その経験を実践者自身の言葉で紹介する。そこに示されているのは、教師発信型プロジェクトでの度重なる対話を通して互いのカリキュラムの見える化が進み、授業目的が明確化されたことにより、各教師が自身の授業の改善を図っていったということである。これは、アーティキュレーション事業の主目的であるカリキュラムの連続性構築への努力が教師の日本語教育に対する意識に変革をもたらし、更に、カリキュラムの向上につながり得ることを示すものと考えられる。次に、J-GAP USA事業の4年目の活動として、バージニア州、メリーランド州の経験を基に築いたアーティキュレーション推進のためのモデルを、他州の教師会(フロリダ州日本語教師会、南東部日本語教師会、デラウェア・ヴァレー日本語教師の会) 会員に紹介したが、それぞれの地域の環境的特徴、会員のカリキュラムアーティキュレーションへの理解度、教師間のコミュニケーションの度合いなど諸々の要因により反応が異なることが分かった。各地域の反応や経験も関係者自身の言葉で紹介する。前述のモデルのインパクト、広がりの可能性に関する考察を推し進めるために、現在各地域の反応を比較検討中である。

SESSION 2-E: LINGUISTICS PAPERS [COLORADO ROOM]

Chair: Ikuko Okugawa, University of Tsukuba

“Learners’ use, perception, and recognition of and motivation to learn the Japanese gender forms”
Junko Ikeda Schwartzman, SUNY New Paltz

The present study investigated Japanese learners' use, perception, and recognition of and motivation to learn Japanese gender forms. Although native speakers of Japanese use the gender forms to create solidarity, communicate more effectively, and make

relationships to one another closer (McGloin, 1997), learners tend to use the gender forms only infrequently (Asada, 1998). Considering learners' inability to use the gender forms, researchers claim that the gender forms need to be taught more in class (Ishida, 2009; Kakegawa, 2009). However, before teaching the gender forms, which could be a controversial topic for some learners, instructors should know how much knowledge, understanding, and motivations learners have regarding the gender forms (Thomson & Iida, 2002). In the present study, an online survey was distributed to Japanese learners to measure their use, perception, recognition of, and motivation to learn Japanese gender forms and a total number of 110 subjects responded. The study found that 1) learners frequently used the gender forms *ka*, *no*, *sake*, *umai*, but they used *ze* and *kashira* only infrequently; 2) they tended to perceive male forms used by a female speaker as ruder than when used by a male speaker; 3) their levels of Japanese, time spent in Japan, and contact with Japanese native speakers affected their recognition of the gender forms; and 4) the majority of the learners were very motivated to learn Japanese gender forms although some considered the gender forms as sex discrimination. The present study suggests that instructors should not just teach the gender forms in a top-down fashion but must understand learners' needs and awareness of Japanese gender forms first. Designing a class that does not force students to speak in a stereotypical way, but exposes them to various models and has them make their own choices of speech styles, would be beneficial.

「音読における読み誤りの傾向と問題点—発音・アクセントを中心に」 (Phonetic error analysis of intermediate Japanese students' reading from text)

Keiko Okamoto and Miharu Nittono, Columbia University

日本語教育における「音読指導」の重要性についてはこれまで度々議論され、その効果が認められている（中村 2012; 松浦 他 2014）。我々は、そうした音読指導の意義を鑑み、中級の日本語の授業にその指導を取り入れてきた。本発表では2013年秋から2014年春の一年を通じて29人の学生が10回にわたり録音した音読を、発音・アクセントの面から分析し、そこに見られる読み誤りの傾向と問題点について言及する。

データの収集にあたっては次の手順を踏んだ。

- ①学生に定期的に教科書本文を音読、録音させる
- ②教師はそれを聞き、紙の評価表と「声」のフィードバックを返す
- ③学生はそのフィードバックを基に、同じ文を再度音読、録音
- ④②を繰り返す

このようにして得られた音読記録を分析した結果、発音に関しては以下の誤りが見られ、初級で習得すべき語彙にその傾向が顕著であることが確認された。

- ①撥音の後に母音が続く場合、な、に、ぬ、ね、の という一音に近くなる：

日本へ→にはね

- ②撥音が短い：新年→しねん

- ③長母音の長さが十分ではない：病気→びょき

- ④促音が短い：結婚→けこん

- ⑤短母音が長母音になる：五人→ごうにん

また、アクセントにおいては、誤って

- ①一拍目にアクセント核を置く：でんわ→でんわ

- ②二拍目にアクセント核を置く：おかね→おかね

- ③三拍目にアクセント核を置く：ともだち→ともだち

- ④助詞の前の拍にアクセント核を置く：わたしの→わたしの

等の傾向が認められた。特に平板型の語に核をつけるという誤りが目立ち、初級レベルの語彙にその誤りが多く現れた。

最後に、本発表では上述の誤りがいかなる環境下で頻繁に起こるのか、またなぜ起こるのかについて考察を加える。

「日英語ナラティブにおける事態把握と日本語初級教科書での事態把握の傾向」 (Construal in Japanese and English narrative discourse and in beginner Japanese textbooks)

Ikuko Okugawa, University of Tsukuba

本研究では、1) 日本語と英語のナラティブにおける事態把握の傾向を提示し、その後、2) 主に大学で使用されている日本語初級教科書において、事態把握に関連する文法項目（授受表現、ダイクシス、受身表現など）がどのように扱われているかを示す。まず、1) の調査では、セリフのないアニメーションによるストーリーテリングをデータとして使用し、日本語母語話者、日本語学習者、英語母語話者のそれぞれのナラティブにおいて、好まれる事態把握がどのようなものかを明らかにする。次に、2) の調査では、主に日本語初級教科書（『みんなの日本語』『Japanese for Busy People』『げんき』『Situational Functional Japanese』など）で使用されているイラストを調査し、教科書で使用されているイラストが実際の日本語母語話者の事態把握と同じものであるか、違う場合はどのように改善すればよいか具体案を提示する。調査の結果、下記の点が明らかになった。

1) 日本語母語話者は、事態をストーリーの主人公の視点から臨場的・体験的にとらえる、いわゆる＜主観的把握＞の傾向が顕著であるが、英語母語話者は事態の外から傍観者として体験する＜客観的把握＞をおこなう傾向がある。さらに、日本語学習者は上級学習者においても日本語母語話者のように主人公の視点から一貫して物語を語る＜主観的把握＞が難しいことが示された。

2) 初級日本語教科書のイラストは、日本語母語話者の好む主観的把握ではなく、客観的把握で描かれる傾向がある。また、そもそも視点がどこにあるのかを示す絵になっていないものも多い。主観的事態把握が話者の視点からの事態把握であることを考え、話者をゼロ化し、話者の＜見え＞からイラストを描く必要がある。

SESSION 2-F: LITERATURE PAPERS [ARKANSAS ROOM]

Chair: Cheryl Crowley, Emory University

"Kaguyahime as marginal: How classical and modern figures mingle to create new ideals"

Miyabi Yamamoto, Centre College

Kaguyahime's story, *Taketori monogatari* (The Tale of the Bamboo Cutter), has been retold over a millennium in Japan. Characterizations of Kaguyahime have varied widely mainly because of the inconsistency of character development within the original text. The contemporary period evokes the Kaguyahime figure in at least two of the three following characteristics: One, her refusal to engage in a heteronormative relationship; Two, her refusal to act like a conventional 'woman'; And, three, her drastic transformation at the narrative climax. In this presentation, I take varying contemporary examples of Kaguyahime figures including ones from a 1987 film, a 1987 interpretation of *Taketori monogatari* into contemporary Japanese, and a 1990 novella, *Bokuwa Kaguyahime* ("I, Kaguyahime"). These contemporary texts all highlight Kaguyahime's place of origin as the moon, but they also often associate her with the *shōjo*, or young adolescent female figure. The association between Kaguyahime and *shōjo* is significant since it is through this tie that Kaguyahime comes to be a 'feminist' role model and the *shōjo* attains the autonomy free of social expectations of heteronormative marriage and childbearing. Through this presentation, I will show how a classical and a contemporary figure, Kaguyahime and the *shōjo*, mingle to create a third new figure that redefines both of the original figures.

"Emotional registers of the Kagerō Diary"

Maggie Childs, University of Kansas

The persistent western interpretation of the Kagerō Diary (*Kagerō nikki*, 10th century) has been that the author wrote primarily to vent her frustration and disappointment about being married to Fujiwara no Kaneie as the second of his several wives. She is typically presented as a jealous and unhappy woman. On the other hand, the perspective of Japanese scholars is that the author considered her marriage a splendid one. I will present a quantitative analysis of the diary to show the degree to which she expressed contentment, a sense of accomplishment and other positive feelings. My results indicate that the author was actually quite proud of herself, although cultural norms required her to veil that feeling. Even when I have explicitly advised students to watch for the positive elements in the diary as they read it, they usually fail to see them. This paper is intended in part to help instructors who include the diary in their Japanese literature courses.

"Poetry for non-poets: Uta as utility in the late medieval period"

Janet Ikeda, Washington and Lee University

The late medieval period has been described as a barren literary era reflecting a very dark age in the history of the *uta* tradition. Some claim it is impossible to name a single epoch-making literary work and others have been so harsh as to disparagingly compare the *uta* of this period to a mountain of debris. While the writing of *uta* was seemingly pilfered from the court and adopted by cultural circles that included the warrior elite, linked-verse masters and merchants, it is undeniable that the 31-syllable form and a knowledge of the literary canon was essential to the art of tea known as *chanoyu*. This paper will examine how tea practitioners and others utilized the *uta* tradition as a teaching device. In describing the basic precepts of *chanoyu*, tea masters often cited Fujiwara Teika's "*aki no yūgure*" (dusk in autumn) poem and Ietaka's "*yukima no kusa*" (green shoots among the snow) poem. Sen no Rikyū wrote one hundred *dōka* or didactic poems on the practice of *chanoyu* and prominent warrior families, such as the Hosokawa, recorded moral instruction in the form of *kyōkun no uta*. The most fascinating use of the *uta* tradition can be found in the practice of bestowing names upon tea utensils. A large proportion of utensil names, known more specifically as *utamei*, can be traced to classical poetry collections. Naming functioned in several ways; it created an identity for the utensil, provided a provenance or lineage, legitimized the cultural, sentimental and even market value of the utensil, strengthened the utensil's link with a legendary and historical past, forged associative links with other traditions such as medieval drama and Heian narrative, heightened an awareness of Japan's geographical and poetic landmarks, and required an intimate knowledge of literary traditions.

"The nun and the courtesan: Haikai poets Kaga no Chiyo (1702-1775) and Toyodaya Kasen (1716-1776)"

Cheryl Crowley, Emory University

Kaga no Chiyo, the most well-known early modern female *haikai* poet, came from a family of artisans living in Mattō (modern Kanazawa). A student of Bashō disciple Kagami Shikō (1665-1731), she was a collaborator in the verse sessions and publications of the Mino faction of the Shōmon (Bashō school). During her lifetime she developed a reputation first in the Hōkuriku region and eventually all over Japan. At the same time, in nearby Mikuni-minato (modern Sakai), Toyodaya Kasen was active the *haikai* circles around Fukui. Adopted into a family of brothel owners, she became a celebrated courtesan who eventually established her own brothel, Toyodaya. Chiyo and Kasen are known to have met each other at least three times, and exchanged verses, corresponded, and collaborated on a number of *haikai* publications. While *haikai* was less accessible to women than *waka*, Chiyo and Kasen were two examples of the small but significant number of women who were able to flourish as poets, teachers, and leaders in the *haikai* community. My paper examines the relationship of these two remarkable women, and the social and economic context of the Hōkuriku area which enabled them to flourish as artists. I look at their verse, letters, and the poetic anthologies to which they contributed to better understand how they were able to overcome obstacles of gender and social status, and the significance of their friendship in their lives as poets.

12:30 a.m.-1:30 p.m. — Lunch Break

12:30 p.m. – 1:30 p.m.

“Marugoto” Workshop

Michigan Room

Sponsored by Sanshusha, Kinokuniya, and JPT America. At this workshop, the publishers of *Marugoto: Japanese Language and Culture* will introduce the new textbook series, the ideals and standards behind its innovative design, and the reception it has received worldwide. Refreshments will be served. **RSVP required in advance**; please email info@jptamerica.com.

12:30 p.m. – 1:30 p.m.

Special Interest Group Meetings

Community College SIG: Arkansas Room

Professional Development SIG: Colorado Room

Proficiency Assessment SIG: Huron Room

Study Abroad for Foreign Language Advancement SIG: Ohio Room

1:30 p.m.-3:10 p.m. — Session 3

SESSION 3-A: PEDAGOGY PAPERS [HURON ROOM]

Chair: Rizu Inoue, University of Tsukuba

「日本語の履修をより長く継続させるには」 (Investigation into the factors in discontinuance of Japanese language learning)

Keiko Ueda, University of Missouri, St. Louis

MLA (Modern Language Association) の外国語履修に関する2012年の調査によると、日本語はイタリア語に次いで第六位の履修者数を保っている。しかし日本語教育界では、日本語プログラムの存続の危機について学会等で頻繁に話題として取り上げられており、日本語教育者の関心を集めている。アメリカの高等教育機関では、日本語に限ったことではないだろうが受講者の大半が外国語の必修を終えた時点で履修をやめてしまう傾向が顕著に見られる。Saito-Abbott and Samimy (1997) の報告によると、履修をやめてしまう要因として、1)日本語の難しさ、2)他の授業と重なって取れない3)自分の学校で日本語が開講されていない、もしくはレベルが限られている4)時間を費やして学ぶことによる将来への利益が見込めない、が挙げられている。

これらの問題を解決するのは困難であると思われるが、その問題を解決し日本語プログラムの質を上げていくことはアメリカの日本語教育の存続に必要不可欠であると考えられる。学習の継続を妨げる要因は何なのか、学習を継続したい学生が続けられる環境を作るために現場の教師ができることは何なのか。

日本語を履修した学生がその後の履修を継続するか否か、またその理由について調査するため、中西部の州立大学の2年生レベルの学生を対象にアンケートを行った。質問項目は学生の学年・専攻・出身国・母語、日本語プログラムに対する評価、履修をやめる理由、日本語プログラムに望む改善点についてなどである。アンケート結果をもとに、日本語学習を継続させるには、学生がより満足する学習経験を得るためにはどのようなことが求められているかについて考察した。

「日本語プログラムの評価に関する一考査：e-Portfolioを使ったアセスメント」(Effective use of e-portfolios for Japanese program assessment)

Yoshiko Saito-Abbott, California State University, Monterey Bay; Motoko Tabuse, Eastern Michigan University

斎藤・田伏の2012年の調査では、日系企業や政府関係者が求める日本語能力と大学のプログラムが目標とする日本語能力の間かなりの差があるという結果がでた。さらに、この調査の今後の課題として（１）各大学が各自のプログラムで目標とする日本語能力の達成度を調べることで、また、（２）プログラム自体の見直しを提言した。本発表は、上記の研究結果と課題に基づいて、効果的なプログラムのアセスメントを遂行するためには、どんなデータを、いつ、どのようにして収集するかを提案する。本発表では特にe-Portfolioに注目し、その効果的な使い方を紹介する。まず、教師はe-Portfolioの目的を学生に説明し、学生自身に日本語専攻プログラムのLearning Outcomesをよく理解させる。そして、そこに書かれている目標達成の方法を考え、計画させ、毎学期それぞれの目標をどのように達成して行くかを内省し、自分がよいと思うサンプルを履修したコースから選び、それをe-Portfolioに記録して行く。教師は定期的に学生のe-Portfolioを調べ、進展の度合いについて学生と話し合う。このようにして、日本語専攻の学生がe-Portfolioを使いながら、積極的に自己の言語および文化習得の成長過程を理解・認識する。そして教師の指導のもとでシステムティックに学生個人の日本語能力、文化知識、留学経験、リサーチの成果を記録する。卒業時にはそれぞれの学生の長期的な学習の総括ができる形になっている。e-Portfolioは学生の就職活動にも役立つ。さらに、日本語プログラムの評価にも適している。

“Collaboration and co-teaching of Japanese ethics and language: A Japanese FLAC course on industrialization and environment”

Nobuko Chikamatsu and Yuki Miyamoto, DePaul University

This presentation discusses an interdisciplinary course taught at a U.S. university through a collaboration between Japanese language and Studies faculty with a theme of Japan's industrialization and its effect on the environment and human body. The course is co-taught (i) by a specialist in Ethics (as a regular content course in English twice a week for 3 hours), and (ii) by a Japanese language specialist (as an adjunct Japanese language section once a week for 1.5 hours) to advanced learners of Japanese who enrolled in the Ethics course. The format is known as FLAC (Foreign Language Across the Curriculum), which challenges students to develop language proficiency through content learning. The content aspect of the course covers environmental issues, industrial diseases, and religious and ethical implications of industrialization. It presents as case studies the Ashio Copper Mining, Minamata disease, and Fukushima nuclear disasters. In the language section, students are assigned Japanese reading materials each week, and challenged to (i) evaluate them closely in their source languages to analyze the views of the writers, and (ii) understand dichotomies embedded in issues (e.g., industrialization vs. nature, victim vs. aggressor, government vs. citizen). Course language learning includes etymological analysis of environmental lexicons (e.g. 自然), translation of literary works (e.g. Miyazawa Kenji, Ishimure Michiko, anti-nuclear poems) and analysis of Japanese language pop media in manga, music, and films (e.g. Tezuka Osamu's Black Jack, Dave Specter's Twitter dajare, Miyazaki Hayao's Spirited Away, or Nausicaä). The course presents an innovative model to discuss (i) how linguistic analysis and content learning can be integrated through an intriguing theme, (ii) each learner's personal responsibility as a bilingual individual in today's plurilingual society, and (iii) interdisciplinary approaches and collaboration in language and area-studies education.

「サービス・ラーニングの実践とプログラム開発」(Practice and program development of service-learning)

Rizu Inoue, University of Tsukuba

本発表では、サービス・ラーニング（SL）の実践事例を2つ報告し、SLプログラムの設計方法および学習評価の観点について議論する。2つの実践は、東京都台東区に所在する日本語学校にて筆者が行ったものである。実践プログラムは、唐木（2008）を参考に「問題把握」→「問題分析」→「意思決定」→「提案・参加」の学習段階を経るプロジェクト型になるよう設計した。プログラム①は、台東区役所のきれいなまちづくり政策に参画し、区認定の大江戸清掃隊の活動に取り組んだ。プログラム②は、地元警察署の方との打ち合わせにより、高齢者の自転車転倒事故防止に向けたヒヤリハットマップの作成を行った。いずれも、「提案・参加」の段階では、区役所の方や警察署の方に課題解決方法を直接提案する発表の場を設けた。参加者の主な意見は次の通りである。学習者からは口頭能力の向上を実感する声、サービス活動による、感謝される喜び・活動享受感・社会認識の深まり・他者への理解／共感／歩み寄り等、その他の意見として、自尊感情の獲得・情報収集能力・問題解決能力・勉学の意欲・社会との一体感・日本語学校の社会的アピールへの貢献を述べる意見、さらに、プログラムを通して地域社会の一員としての自覚を持った様子が伺えた。区役所の方や警察署の方からは、本プログラムの遂行による「学校-地域、学校-行政、行政-地域」の互惠性を評価する声が聞けた。実践による成果および残された課題に対する反省を踏まえ、発表では、プログラム設計の留意点および学習評価の観点を提示する。また、SL導入の約1年半にわたるプログラムの成長過程や学校を取り巻く様々な関係性の変化についても触れる。

SESSION 3-B: PEDAGOGY PAPERS [MICHIGAN ROOM]

Chair: Asami Tsuda, University of British Columbia

「初級教科書『オンラインで学ぶ日本語』の設計理念と内容紹介」(A new Japanese online textbook "Online de manabu Nihongo": Content and design philosophy)

Mariko M. Wei, Purdue University; Kazumi Matsumoto, Ball State University

近年eBookの普及が本格化しており、教科書も電子化されていくことは必定である。エンジニアや出版社に電子教科書の形を決められてしまう前に、我々語学教師側から電子教科書のあり方を打ち出していくことが急務であると考え、我々はオンライン教科書なればこそ実現可能な特長を持つ初級日本語教科書を構想し開発に着手した。

本書の各章は、モデル会話・単語リスト・文法説明・文法説明ビデオ・各種練習で構成されている。一章は短く、それぞれのプログラムの事情にあわせて進行速度を決めることが可能である。導入する文法項目、会話表現を盛り込んだモデル会話を中心として構成され、学習者は付属のDVDではなく、教科書に埋め込まれたビデオをクリックして視聴出来る。従来の教科書ではモデル会話は当たり前のよう文字で提示されてきたが、ビデオ化する事によって口調、表情、視線、態度、周りの状況などの非言語情報が脱落することを防ぐことができる。そして、モデル会話の理解を深めるために、文法解説のビデオをつける。これで文法のレクチャーは不要となるし、反転授業 (Flipped Classroom) モデルに則った教え方にも対応できる。単語リストには全て音声情報が加わり、いつでもクリック再生できるようになっている。そして、各種練習はスピーキングをふんだんに取り入れた文型練習から談話レベルの練習へと段階的に導く。また、従来の教科書はワークブックとCDを別途で購入しなければいけないが、この教科書では教科書とワークブックが有機一体化されている。

本発表ではオンライン教科書の設計理念を説明し、第一課から三課までのデモンストレーションを行なう。

「スピーキングを重視したオンライン日本語コースの設計・開発・運用」 (Design, development, and operation of a speaking-focused online Japanese course)

Mayu Miyamoto, Hiroko Mishima, and Shohko Yanagisawa, Purdue University

一般的にオンラインコースに対しては、「非同期的な学習が中心であることが多く、接触時間が限られているため、インタラクティブな口頭及び会話練習には適さないだろう」という認識が持たれることが多い。従来のオンラインコースでは、事前に録画されたビデオを主に聞いて/見て学ぶことに重点が置かれており、通常の対面式授業のようにスピーキング能力を伸ばすのは困難だと考えられている。これを踏まえ、当プロジェクトでは学習者に個別の口頭練習の機会を与える self-learning と、オンライン上で教師1人に対し学生2人という少人数で対面する real-time session の二部構成から成るオンラインコースの設計・開発・運用を行った。Speak Everywhere (SE) を使用し、多様な会話場面設定及びタスクを与え、学習者から自然な発話を引き出すことを目標とした。オンラインコースの設計・開発においては1) 各課において目標を明確に定め、学習者に提示し、2) それを踏まえた上で、学習者と週に一度のオンラインでの対面授業を設けた。この対面授業では、学生の達成度を確認にするとともに、文法練習の枠を超えた談話レベルの会話練習を促し、3) real-time session でのアクティビティを遂行するのに必要な語彙・文法・知識・技能等を習得できるように、self-learning では反復練習、質疑応答練習、ロールプレイ等のスピーキングを中心とした非同期的なタスクを提供し、real-time session との連携を図った。本発表では、主にSpeak Everywhereを用いたオンラインコースの構築過程・実践報告、学生からのアンケート結果、それに伴う課題について発表する。

“Effects of online repetition practice on promoting mora awareness”

Natsumi Suzuki, Purdue University

Japanese learners often have a difficult time in acquiring both accurate perception and production of Japanese special moras. Since errors on Japanese special moras can change the meaning of words, it is important to promote mora awareness in an early stage of the learners' language learning process. However, pronunciation practice including special mora is often dismissed in the classroom due to time constraints and other reasons. That is why an online system, available outside the class time, could be beneficial in promoting students' acquisition of special moras. This study investigates the effectiveness of online training methods for learners' acquisition of special moras, focusing on long vowel production.

In this research, 25 words containing long vowels and five fillers were selected. A group of first year Japanese learners were divided in three groups; 1) online audio training group, 2) online audio + visual cue training group, and 3) control group. While the two training groups were given listen-and-repeat online practice with and without visual cues, the control group received a classroom-style presentation and practice of the same set of words. The visual cue in this research modeled a “karaoke” system, where each mora in the word appears at the same time as when that mora is pronounced, and this system was designed to promote mora awareness among learners. Recent studies have focused on wave forms as visual cues in training learners to perceive the length difference, but found that this type of visual cues may not be as effective since wave forms do not always show a clear distinction between a long and short vowel.

In this presentation, the result of the effectiveness of the new visual cue will be discussed through the analysis of data, as well as examining the future possibilities of Japanese special mora training.

「オンライン発音学習教材の効果と意義：音声研究の成果の応用可能性」 (Meanings and effects of online pronunciation learning material: Possibilities of applying the outcomes of speech research)

Asami Tsuda, University of British Columbia; Kazuhiro Yonemoto, Tokyo Medical and Dental University; Hisako Hayashi, Simon Fraser University

日本語学習における発音の重要性は、教師・学習者双方に認識されているにも関わらず、一クラスの学習者数や授業時間数、指導用教材や専門的知識の不足などを理由に、十分には行われてこなかった(柴田・松崎, 2012; 小河原・河野, 2002)。さらに、発音指導が行われても、これまで指導に用いられてきた視覚情報は静的で直感的ではないという問題が指摘されていた。そこで、本発表では、音声言語学の専門家と共同で開発中の教材を例に、オンライン発音指導教材の効果と意義について議論する。開発中の教材の特徴は、1) 発音だけではなく、音声学的内容も含め、音声学習を包括的に捉えていること、2) 説明から練習まで全てをオンラインで視聴できること、そして、3) 他言語の特徴との比較や超音波映像の活用など音声言語学の成果を積極的に取り入れていることにある。カナダの大学の初級日本語コースにおける試験的導入の結果、学習者が意識的に自身の発音をモニターするようになり、さらにただ音声をまねるだけではなく、自身の第一言語との違い、舌の位置や動きなどを考え、練習している様子が観察された。今までは個人、または教師と一対一で取り組んできた発音練習に対する印象が、クラスでの協働作業を行うことでポジティブなものになり、また、学習

者の一人ひとりの学習進度だけではなく、興味・関心や必要性に合わせた学習も可能となることが示唆された。今後の可能性として、発音学習＝個人学習という固定概念から抜け出し、個人レベルの自律学習だけではなく、教室において協働のできる発音学習のためのカリキュラム作りも視野に入れて行きたい。

SESSION 3-C: SECOND LANGUAGE ACQUISITION (SLA) AND PEDAGOGY PAPERS [OHIO ROOM]

Chair: Miki Yagi, Harvard University

「日本語初級学習者を対象としたオンラインカタカナ語練習教材の効果」 (Effects of online katakana word recognition practice for Japanese beginning learners)

Yumiko Tashiro, Purdue University

日本語は、ひらがな、カタカナ、漢字の3種類の表記形態を用いる複雑な言語として知られているが、日本語教育においてカタカナの指導はひらがなや漢字の指導に比べ、十分な指導時間を設けていないことを教師は認識していて、学習者側からもカタカナ指導を求める声が上がっている(中山他, 2008)。実際、カタカナで表記される語数は年々増加しており(Kay, 1995)、それに伴いカタカナ語を練習する教材が出版されていることから、カタカナの効果的な指導方法が現在も模索されていることが伺える。

本発表では、日本語初級学習者を対象にして授業時間外で行われたオンラインのカタカナ語練習教材の使用効果について報告する。36名の学習者は、4週間に渡るトレーニングを各自オンラインで行い、その前後にカタカナ語を読みあげる音読テストと元となっている英語の言葉を答える単語テストを行った。トレーニングは三種類あり、カタカナ語の音声聞き、文字を並び変える練習をしたグループ、与えられたカタカナ語を音読する練習をしたグループ、そして統制群としてカタカナ語の代わりにひらがなの単語を練習したグループである。練習で使用したカタカナ語は、英語からカタカナへと変換する時点で起きる音声変化が特殊な語を30語、『ななかま1』より選んだ。練習の前後で行ったテストには未習語30語が含まれ、練習方法の異なるグループ間の既習語の練習の効果を分析すると共に、その練習効果が未習語にも現れているかどうかを検証した。その実験の結果と実験後に行ったオンラインでのカタカナ語練習教材に関する学習者のアンケート結果より今後のカタカナ語指導の可能性について考察する。

“Internal and external contributors to Japanese learners’ perception of lexical pitch accent”

Seth Goss and Mineharu Nakayama, Ohio State University

In standard Japanese, individual words carry a pitch pattern as part of their phonological form. For second language (L2) learners of Japanese, the ability to accurately perceive this word-level pitch accent does not appear to develop in parallel with proficiency level, with a wide degree of individual variation reported in previous research. The current study explored both learner-internal, or cognitive, factors and external contributors to individual variation in the development of pitch accent perception ability over a semester of beginning Japanese study. We argue that differences in basic cognitive resources, such as acoustic pitch sensitivity and phonological short-term memory capacity, as well as external factors, like learning context and instruction style, may account for some of the reported variation in L2 accent acquisition.

Thirty-six English-speaking learners in their second year of Japanese study participated in this research: 16 undergraduates at a large American university and 20 study-abroad students at two Japanese universities. We measured the acoustic pitch sensitivity and phonological short-term memory capacity of all learners early in the semester of Japanese study. We then tested both groups’ perception ability in a two-phase listening task which required learners to first judge the correctness of an aurally-presented word’s accent, and for the correctly accented words only, categorize its accent pattern using visual representations of pitch contours.

Three findings accounted for the performance variation over a semester of Japanese study. First was that basic acoustic perception ability predicted gains made on the accent pattern categorization task. Next, on the correctness judgment task, phonological short-term memory capacity significantly predicted accuracy gains. Lastly, the presence of explicit correction/feedback on accent (i.e., instruction style) contributed to greater overall accuracy than learning context (i.e., whether at home or abroad), suggesting that the higher-input study-abroad context was not universally beneficial to all learners.

「録画課題と学生によるその自己分析:メタ認知的観点からの教育効果」 (Video-recording assignments and students’ self-analyses of recorded speech: Educational effects from the meta-cognitive viewpoint)

Yumiko Kawanishi and Mayumi Ajioka, University of California, Los Angeles

テクノロジーが教育現場で活用され、多岐に渡る試みがなされるようになって久しい。本稿では、身近なテクノロジーである録画を活用し、学習者に自らの中間言語の有り様に対する気づきを促す機会を与える課題を提案する。この方法により、実際のクラスでも学習者一人ひとりにきめ細やかな発話上達のためのケアが可能となる。具体的には、クラスの課題として、2分程度の身近な出来事の叙述を定期的に録画させ、その録画を見直し自己分析した上で、上達レポートとして提出させる。これに教師はフィードバックを与え、次の録画につなげる。ビデオを活用した課題はこれまでも見られたが、本稿ではメタ認知 (Anderson 2002など) の観点から、自分の発話を分析、モニターしながら発話の上達を促すことを強調する。ここでは、その手順および実際に大学の4年生レベルのクラスで応用し、以下のような効果が得られたことを報告する。(1) 記録として残るという意識が働くため、録画中に学習者自身が自分の発話の改善点に注意を払いながら話することができる、(2) 課題として取り組むため、意識的に間違いを減らそうと努力する、(3) 録画された自分の発話に見られる問題点を直視することで、それらを客観的に認識でき改善の動機づけになる。こうしたメタ認知的学習を積み重ね、最終的に発話の流暢さが高まり、「comfortable speech (Ajioka in press)」が期待される。また、学生の上達

レポートにより実際に意識して発話に臨んでいること、自己モニターがなされていることなど、録画課題が効果的であることが確認できた。

**「音韻の意識向上を目指したオーディオブック制作の実践報告：小説を「読み」「書き」「語り」「聞く」」
(Heightening awareness of phonetic roles through creating an original audiobook)
Miki Yagi and Yumi Masui, Harvard University**

本プログラムでは、二年目後半以降、文化、社会、歴史など様々なコンテンツを学ぶ生教材を使用している。読解の教材を中心に学習する上で、学習者の音韻に関する課題が顕著になってきた。漢字圏の学習者は漢語や漢字の意味の推測が可能のため、読解や作文では使えるが、正確な発音ができないという傾向が見られる。一方で、非漢字圏の学習者は、そのような推測ができないため辞書は使用するものの、正確な音韻と意味の定着に時間がかかるという課題が見られた。いずれも音韻の練習が不十分であれば語彙や表現の定着に影響があり、個人差も目立った。城生と松崎（2001）によると、教師の捉え方とは裏腹に、学習者側のニーズとしては音声教育を渴望する声が高いということが、統計データによって裏付けられている。これらの課題に対し、音韻の有効な練習を取り入れつつ、その他の技能も取り入れた総合的なプロジェクトはないかと考え、今回のオーディオブックプロジェクトを行うに至った。このプロジェクトは、村上春樹の短編小説の一部を読解後、その小説の続きを書かせるという個々の独創力を尊重した作文課題を与え、その自作の小説をオーディオブック化することで、音韻に注目しながら「物語を語る」「伝える」という音読練習を取り入れた。さらに、学習者同士がそのオーディオブックを聞き合い、その内容の簡単な書評を書かせるという総合的なプロジェクトを試みた。本プロジェクトを通し、学習者の中上級での音韻の正確さの必要性に対する意識の向上を問うと共に、教師の役割と介入の仕方、総合的なプロジェクトとしての適切さを問い、今後の課題を検討し提示する。

SESSION 3-D: STUDY ABROAD SIG PANEL [MISSISSIPPI ROOM]

Chair: Yoshimi Sakakibara, University of Michigan

Panel Title: 「日本語夏期集中講座におけるコミュニティの形成：四つの実践報告」 (Building Communities in Intensive Summer Japanese Courses)

夏期集中講座は、日本語や文化を集中して学びたい学生にとって絶好の機会である。では、実際にそこではどのような学習が行われ、学習者は何を経験できるのだろうか。本パネルは、日米で行われる4つの日本語夏期集中講座の実践報告である。地域は異なるが、いずれも初級から中上級までの8週間のプログラムであり、主に大学生を対象とする点で共通している。これらのプログラムが上記の課題を考察したところ、コミュニティの形成が重要であるとわかった。例えば、地域との連携を図る「地域コミュニティ」や学習者同士や教師間との「学習コミュニティ」の重要性である。そこで今回は以下の発表を予定している。米国バーモント州のプログラムでは、日本語イマージョンの学習環境の下、授業やその他の活動を通して学習者同士、学習者と教師など様々な種類のコミュニティを形成する。発表ではこれらのコミュニティの種類、学習への影響を考察する。滋賀県のプログラムは、プログラムを学習者と地域の「中心的な共有空間」と位置づけ、そこを出発点として学習者同士のさらに密なコミュニティの形成、及び地域社会に溶け込むために行っている促進活動の実践報告をする。石川県のプログラムは、学習者と地域が協働で学習できる環境の構築をめざしている。学習者がホストファミリー、地元企業、高校生向けプログラムとの繋がりを通じて、どのように地域社会参加への意識が変化しているかを考察する。北海道のプログラムは、学習リソースの点から学習者のアンケートを分析し、地域社会との連携や学習コミュニティの形成が言語や文化・社会の知識の習得や留学の成功に大きな役割を果たすことを発表する。

**「イマージョン環境の日本語夏季集中講座における学習コミュニティ」(“No English Spoken Here®”: Learning communities in an intensive immersion language program)
Ayaka Sogabe, University of Michigan**

本発表は米国バーモント州にあるミドルベリー大学で毎夏開校されている10のLanguage Schoolsの一つである日本語夏学校における教育実践の報告である。当講座ではプログラムの始めに受講者が日本語だけの使用を誓う「Language Pledge®」にサインをし、以降プログラムが修了するまで8週間、日本語だけで生活する。近年では、自律学習、協働学習、ピア・ラーニングの重要性が多く報告されているが（梅田2005等）、本講座の学習者はイマージョン環境において、教師と学習者、同レベルの学習者同士、さらに異なったレベルの学習者同士など様々な学習コミュニティを形成し、自律学習、協働学習の実践を行う。授業は言うまでもなく、学習者にはあらゆる種類の学習リソースが提供される。特別講義、運動会や夏祭りなどの行事、パーティーやカラオケ、映画会などのイベント等である。これらの行事やイベントに学習者は教員とともに準備段階から参加する。また、クラスメートや友人と過ごす自由時間、朝昼晩の食事の時間も日本語を使用する時間であることから、学習リソースの一つだと考えられるだろう。我々はこれら「学習者が日本語を使用するあらゆる場面」が言語学習につながり、学びとコミュニティは切り離せないと考える。本発表では、当夏期講座の詳細と提供される学習リソースについて説明する。その中で、学習者はどのような種類の学習コミュニティを構築し、それぞれのコミュニティでどのような学びが起きているかを考察する。プログラム参加者へのアンケート結果も考察し、よりよい学習コミュニティ構築のための今後の課題についても述べる。

**「コミュニティ：内と外へ」(Community: Inward and outward)
Minoru Aizawa, Japan Center for Michigan Universities**

ミシガン州立大学連合日本センターが滋賀県彦根市に設立され四半世紀が経つ。この間、全米各地からの大学生が比較的短期とはいえ円滑に地域社会に溶け込み充実した滞在が出来るよう、各学期（秋、春、夏）を通じて言語活動を中心に様々な試みをしてきた。一方で、日本語集中講座という学業優先の環境の中、またある種の居心地の良さからか、センター宿舎棟内でかなりの時間を過ごす学生が存外多いのも事実である。こうした意味では、我々が、センター内での生活の充実を計ると共に、いかにして学生の負担にならない範囲で地域住民との交流を担保するかが大きな課題となってきた。本発表は、コミュニティを「個人が集団全体に結びつくために持つ中間的な集団」（広井、2009）と定義し、2014年度の夏期集中講座を例とした促進活動の実践報告である。中心的な共有空間としての本センターがどのように内部的関係性の形成に助けとなっているか、どのようにその関係性を強化できるか、さらにはどのように外部との関係性へと発展させられるか、などの点について考え、今後への一助としたい。具体的には、「プログラムの概要」を述べた後、センター主導による「内部の関係性を深め外部との関係性を促す諸活動」、「両者の相互補完性」、またその他「学生の自主的活動」などについて、課題を含め考察を加えることを予定している。できれば、留学生が一時的な居住者としてどのような地域貢献が出来るかについても言及するつもりである。

「地域社会との連携への取り組み」(Collaborative approaches to increasing involvement with the local community)
Yukari Tokumasu and Tomoko Shibata, Princeton University

本発表は、石川県で実施されている8週間の夏期集中講座(PII=Princeton in Ishikawa)、その後の石川県内での日米大学生による高校生向けのプログラム(KSS=Komatsu Summer School)及び地元企業でのインターンシップ(IIP=Ishikawa Internship Program)に参加した学生の地域社会との関わりについての報告である。社会文化的アプローチにおいて、言語学習は教室内の活動に加えて、学習者の社会・コミュニティへの参加を通して学ぶ個人の変化の過程だと捉えられ、学習者自身がどのように社会・コミュニティに関わっていけるか考えることが大切であると考えられている(佐藤&熊谷2011)。本プログラムではプリンス頓大学日本語プログラムのカリキュラムに基づいた教室活動と共に、学習者と地域が協働で学習する環境にも焦点をあてている。例えばPIIとIIPはホームステイプログラムであるが、特にPIIの学生達は忙しい学習活動のため、ホストファミリーや地域の人々との交流がなかなか深まらない。この8週間を通して地域の人々と何ができるか何ができたかなどを作文に書き続けてもらうことで、地域社会参加への意識化の向上を目指した。また、PII修了後に、学習者が引き続きIIPまたはKSSに参加することで、彼らの地域社会参加への意識の変化、地域への自分たちの影響などをインタビューやアンケートで調査する。これらの作文、インタビュー及びアンケート結果を考察し、今後の地域社会との連携にも言及する。

「留学の成功をめざして: コミュニティーの視点から」(How can students succeed in study abroad through communities?)
Yoshimi Sakakibara, University of Michigan

本研究は、北海道国際交流センターで行われる夏期日本語・日本文化講座の実践報告である。当機関は長年、地域密着の夏期講座を自負してきたが、果たして留学の成功には何が必要だろうか。今回、留学終了時に行った学生アンケートの回答を分析し、留学の成功に必要なものを考察した。まず①日本文化・社会の知識 ②日本語能力 ③留学経験の三点についての回答を「学習リソース」（物的リソース・人的リソース・社会的リソース（田中・斉藤1993））の点から分析した。その結果、①日本文化・社会の知識と②日本語能力の上達には、人的リソース及び社会的リソースが、③留学経験の充実には人的リソース、社会的リソース、物的リソースの全てが貢献していた。つまり、留学の成功には各ニーズに合った「コミュニティの形成」が必要だと分かった。例えば、文化社会の知識を得るには、夏祭りなどの地域社会に参加したり、ホームステイを通じて文化社会を中から見るという「交流・体験」が大きな役割を占めている。また、言語面では「継続とルール」がキーワードであり、そこには「学習コミュニティの形成」が求められる。さらに、留学経験の充実には地域社会への参加や人との交流などの人的・社会的リソース以外にも、食べ物や景観などの物的リソースも貢献するため、これらのリソースの情報やアクセスが必要となる。従って、留学の成功は留学機関が地域との連携を密に図り、学習コミュニティや地域社会へのアクセスを提供することと、学習者がどれだけそれを教室の内外で活用したり自ら形成したりできるかが鍵となると分かった。発表では夏期講座の詳細や留学生の声、今後の課題にも言及する。

SESSION 3-E: JAPANESE FOR SPECIFIC PURPOSES SIG PANEL [COLORADO ROOM]

Chair: Yasu-Hiko Tohsaku, University of California, San Diego

Panel Title: 「学習者の専門分野を合わせた日本語教育: 多様化する学習者のニーズに対応するために」(Japanese for Specific Purposes: To Meet the Needs of Diversified Learners)

日本語学習者の背景が多様化している中、学習者の背景やニーズを分析し、さらに生涯学習能力を育成しながら、将来良き社会的貢献者となり得る人物を輩出することを究極的な目的にカリキュラム開発を行なう必要性が生じてきている。本パネルでは、社会科学や理工学の分野を合わせた日本語教育において学習者の様々な技能・能力を発達させることを目指したプログラムの実践報告を行なう。

発表1では、グローバル社会の多様性に対応できるように言語の背景にある社会・文化的要素を批判的に分析する技能養成を目指すために、ビジネスパーソンや日本人留学生と協働で実施したプロジェクトについて紹介する。さらに、メディア・リテラシーを仕事の日本語コースで扱う方法や意義を検討する。発表2では、環境技術、IT、個人情報など一般社会や日常生活に深く関わる科学技術コンテンツを日本語コースに取り入れることの重要性について述べ、その際の検討事項を挙げ、さらに、科学技術のテーマを扱う授業での教材や教授法について提言を行なう。発表3では、学生の専門分

野と関連した就業体験を海外で実施することで、第二言語技能を高め、グローバルに視野を広げる機会を与える国際協同教育プログラムの意義と学習者の専門分野を合わせたカリキュラム開発や学習過程について述べ、プログラムの成果について報告する。

発表4では、日本語を使用して専門的な内容に取り組む政治学、経済学を専攻する大学院生が、フィールドワークを通して協働力を高め、テクノロジー使用によってメディアのリテラシー能力を伸長した過程などを述べながら、社会科学を専攻する学生のための効果的な日本語教育の枠組みを示す。

「学習者の専門分野を合わせた日本語教育：実践共同体で学ぶメディア・リテラシー」 (Japanese for specific purposes: Teaching media literacy through communities of practice)

Yuki Matsuda, University of Memphis

仕事の日本語という日本特有の仕事文化を取り上げる場合が多い。例えば、初めて顧客に会う状況で、名刺の渡し方から自己紹介に取り入れる敬語など日本の職場で起こり得る状況を想定し、ロールプレイなどで運用能力を評価する。このような教授法は言語とコンテクストを結びつける意味で非常に意義がある。一方、文化というものはあくまで流動的であることにも留意する必要がある。仕事の文化は職種・地域・話者の年齢、性別や非母語話者が含まれるかなど様々な社会文化的コンテクストによって大きく変わってくる。日本人同士でも海外で日本語を使って自己紹介をする場合、お辞儀をしながら握手をしたり、英語交じりの日本語を使う場合もある。

このようなグローバル社会の多様性に対応できるように言語教育も社会参加を重視し、実践共同体(Lave and Wenger 1991)を通じて言語からその背景にある社会、文化を批判的に分析するメディア・リテラシーなどのグローバルスキル育成を考慮した教授法が望まれる。

このような教育目標のもと、本発表では現地のビジネスコミュニティを対象にしたメディア・コンテンツ「生活ガイド」マニュアルを日本語学習者が現場のビジネスパーソンや日本人留学生と協働で制作するプロジェクトについて紹介し、既成の立場を強調しきれない「女子力」や企業が欲する行動に扇動する「婚活」など日本のメディアが取り立てる造語を例にあげてメディア・リテラシーを仕事の日本語コースのカリキュラムに導入する方法や意義を検討したい。

「学習者の専門分野を合わせた日本語教育：科学技術コンテンツを取り入れることの意味」 (Japanese for specific purposes: The significance of integrating technical content into Japanese courses)

Michio Tsutsui, University of Washington

現在、米国の日本語プログラムでは、科学技術に特化したコースはほとんど開設されていない。のみならず、科学技術コンテンツが日本語コースに取り入れられることも稀なようである。その理由としては、(1) 理工系学生が相対的に少ない、(2) それもあって、学生からの要求が弱い。一方、教師側は、(3) 理工系のトピックにあまり興味が湧かず、教えるモチベーションを持ちにくい、あるいは、(4) 興味はあっても、専門的なことがあまり分からないので教える自信がない、などが考えられる。

しかし、もしこのような理由で科学技術が日本語教育のトピックから外れているのであれば、これは望ましい状態とは言えない。なぜなら、科学技術コンテンツは、理工系学生のニーズや興味を満たすのみならず、環境、資源、IT、個人情報など、一般学生にとっても自分の将来の仕事や生活に深く関わるテーマを扱うほか、彼らに違った問題を考えさせ、新たな視点を持たせるという重要な意味があるからである。

また、言語スキルの面から見ても、科学技術コンテンツをベースとした読解、ディスカッション、発表、翻訳などの指導は、他のキャリアを目指す学生にとっても等しく有益である。

本発表では、科学技術コンテンツを教える意味を見直し、それを一般日本語コースに取り入れるには何を考えなければならないかを論じる。そして、実践に関しては、先ず、このようなコンテンツを使ってどのようなスキルを教えられるかを考え、次に、科学技術コンテンツを取り込む際のトピックの選び方、基本教材の探し方、教材の作り方、教室での教え方について、発表者の経験からいくつかの提言をする。

「学習者の専門分野を合わせた日本語教育：国際協同教育による将来のキャリアへの影響」 (Japanese for specific purposes: The impact of international cooperative education on future careers)

Noriko Fujioka-Ito, University of Cincinnati

アメリカ合衆国の17,000人を対象に海外教育の影響力を分析した50年間の縦断調査結果の中で、留学未経験者と比較すると、1990年代には留学中に10倍の学生がインターンシップに参加し、卒業後に国内の多国籍・国際的組織に就職する割合が約3倍、海外で仕事をする割合が約2倍多かったことが示されている(Norris & Gillespie, 2009)ように、海外経験によって、第二言語能力とグローバルな視野を持つ即戦力を備えた社会人になる可能性が高められる。広義では、インターンシップと協同教育の用語は相互交換して使用されているが、協同教育では、大学での授業と学生の専門分野と関連した就業体験を交互に繰り返すことで知識の幅を広げて深めることができる。国際企業研修プログラムの学生たちは、海外での協同教育の意義や異文化に適応する対処メカニズムについて学習するほか、第二言語と文化のコースを履修することが義務付けられているが、専門科目の研究や就業体験に費やす時間が大きいために生じる時間的な制約の問題や言語・文化・専門の内容を統合する必要性からカリキュラム開発は容易ではない。本発表では、理論の学習と職場での実践の反復が行える協同教育に留学を付け加えて発展させた国際企業研修プログラムの背景や遠隔教育形態を取り入れるなどの工夫を加えたカリキュラム開発について説明する。そして、異文化の知識を得、適応性・受容姿勢を示しながら学習していく過程や、海外での新環境で国際的な認識力・社会性を発展させて成長し、人生の可能性を広げていくライフストーリーの例を示しながら、プログラムの成果について報告する。

「学習者の専門分野を合わせた日本語教育：社会科学専攻の学生のための日本語教育」 (Japanese for specific purposes: Japanese language education for social science students)

Yasu-Hiko Tohsaku, University of California, San Diego

アメリカにおける日本語教育も成熟し、どんな文法・語彙を教えるかという「なに」の時代から、それを使って実生活で日本語で活動できるように「どう」教えるかを考える時代に移行し、最近では、多様化する学習者のニーズに対応し、日本語を使って社会活動ができるようにする時代に変わってきたと言える。これは、「なぜ」日本語を学習するのかを考え、学習者に対応しようという時代と言ってもよい。多様化する学習者のニーズに対応するためには、それぞれの学習者が実社会で必要とする言語能力のみならず、専門的な内容自体を取り入れ、日本語を使って、様々な言語・社会活動を出来るようにする必要がある。そのためには、言語能力だけではなく、問題解決能力、意志決定能力、高度の思考能力、協働能力、柔軟性、創造性を養うことが重要である。また、テクノロジーが発達した現在では、テクノロジー、メディア、そして情報のリテラシーを身につけることも必須である。現実社会で日本語を使って活動できる人材を養成するためには、これまでの言語能力、専門的内容のほかにも、生きるために必要な社会力も身につけさせることが重要になり、言語教師にも広範な能力が要求される時代と言ってもよい。

本発表では、政治学、経済学を専攻する大学院生のための日本語教育の実例を示し、専門的な内容を読む、書く能力ばかりでなく、日本語を使ってフィールドワークをしたり、テクノロジーを使い、情報、メディアのリテラシーを伸ばし、またインターネット技術を使い、どのように関連する人たちと結びつき、協働能力を高めていったか、その過程を示し、社会科学を専攻する学生のための効果的な日本語教育の枠組みを示す。

SESSION 3-F: LITERATURE PANEL [ARKANSAS ROOM]

Chair: Robert Khan, University of London, SOAS

Panel Title: Showcasing the Elites: Multipolar Elite Participation in Later Twelfth-Century Japanese Court Poetry

It is important to remind ourselves how different the canon of culturally important and aesthetically admirable literary works looked in the Heian period (794-1185) by comparison with how it looks today. Now, far and away the most valorized works of the period are in prose, with the fictional *Tale of Genji* at the top of the list, followed by non-fiction, in the form of women's diaries and the miscellany, *The Pillow Book*. Then, what was important was poetry. Poetry was the pre-eminent cultural form at the Japanese court and had been many centuries, and as such was dominated from earliest times by members of the imperial family and the Capital-based court aristocracy.

This panel will explore how power shifts from the 1150s to the beginning of the 1200s are reflected in changes in the level of participation in imperial poetry anthologies and at court poetry contests by old and new elites. It focuses on the representation of military and Buddhist figures, by newly emergent 'professional poets' from the mid-ranking aristocracy, and by women from various social affiliations, to achieve all-important visibility both in written form and at prestigious social occasions. Examining the *Shoku Shikashû*, the *Senzaishû*, the *Hômon hyakushu*, the *Ropyyakuban Uta-awase*, and the *Shinkokinshû*, this panel will show how these works exemplify the strengthening participation of these social groupings who contributed to the revivification of *waka* poetry in the last half of the twelfth century.

"Don't mention the wars: The military subtext to imperial poetry anthologies in Japan 1155-1185, the *Shoku Shikashû* and *Senzaishû*"

Robert Khan, University of London, SOAS

Two *waka*-poetry anthologies were imperially commissioned in Japan during the strife-torn period 1155-1185, one in the Heike-dominated 1160s, and one in the 1180s which saw the Genji samurai lineage's triumph establish seven centuries of military hegemony in Japan. Each anthology was assigned to a leading scholar-poet of the day, from rival branches of the Fujiwara lineage, and each was compiled and is extant.

Yet 'history' acknowledges only one of these texts of a genre considered, then and now, to reflect the height of cultural achievement. Why? Because in a career catastrophe for the earlier poet, Kiyosuke, the commissioning emperor, Nijô, died just before Kiyosuke's work of several years, the *Shoku Shikashû*, could be formally presented and accepted. Kiyosuke's rival, Shunzei, was much luckier. His *Senzaishû*, despite being commissioned under two rival imperial figures - the child-emperor Antoku under Heike control (and with a Heike mother), and the retired emperor Go-Shirakawa (whose son Prince Mochihito summoned the Genji against the Heike) - became the seventh imperial anthology.

This paper will compare the military subtext to these two works, given the taboo on military themes in conventional poetic topics. It will focus on political implications of poets chosen, and on oblique strategies of arrangement and allusion, showing these ostensibly court-centred, pacific works attest the military rivalries and strife surrounding their gestation.

"Harmonizing Japan's religio-literary synthesis in Jakuzen's *Hômon Hyakushu*"

Stephen Miller, University of Massachusetts, Amherst

The Buddhification of Japanese *waka* in the imperial poetry anthologies intensified during the 12th century culminating with the appearance of the first book of Buddhist *waka* in the *Senzaishû*. Buddhist poetry, known by this time as *shakkyô-ka*, or *waka* on the teachings of the Buddha Śakyamuni, also became a standard topic or *dai* in poetry competitions and *hyakushu-uta*, or one-hundred-poem sequences.

The importation of Buddhist topics into the short *waka* form, however, was not just a unilateral process. Some poets, such as the priest Jakuzen (?1118/1120-?1182), sought to enhance the balance between the literary and the religious in his collections. In his single-authored *hyakushu-uta* called *Hômon hyakushu* (One Hundred Poems on the Dharma Gate), Jakuzen, like other poets of his age, prefaced his poems with short sections from various Buddhist texts and wrote his *waka* based upon

the particular diction of those texts. What makes *Hōmon hyakushu* unique, however, is the prose afterword that follows each poem. In the afterword, Jakuzen contemplates not only the Buddhist teachings, but also the Japanese literary tradition that he represents.

This paper will discuss one *waka* (#88) in particular - what I will call the Toribeyama poem. This poem is composed of a *dai* from the *Ōjōyōshū*, a *waka* on the Toribe cremation fields, and a long afterword written in a faux travel-diary style in which Jakuzen is accompanied by both the literary legacies of Japan's past (Ariwara no Narihara, for example) and the bodhisattva Samantabhadra of its religious present.

"Patrons and professionals: Social constraints on criticism in *uta'awase*"

Thomas McAuley, University of Sheffield

The end of the twelfth century was an unsettling time for the aristocracy of Kyoto. Political and economic power was securely in the hands of the *bushi*, and many nobles were in straitened circumstances. One of the results was the increasing development of 'professional' poets - men who used their poetic skill and knowledge to support themselves and their families, through soliciting economic support from wealthier nobles, or even members of the *bushi*. Simultaneously, the need for the aristocracy to retain some shreds of authority by controlling access to the nation's cultural heritage meant that men of the 'patron' class were often active poets themselves and involved in *waka* development.

One of the main stages on which poetic development was expressed was the poetry competition (*uta'awase*), where two teams of poets each composed poems on specified topics and presented them for judgement to both their opponents and a recognised poetic and critical authority. It was here that differences in poetic conception, style and diction were trialled, tested and either adopted, or rejected. The dual composition of *uta'awase* participants, however, meant that they were often more than simply literary occasions, and success or failure had more than just literary consequences.

This paper will analyse the criticism of the 'Poetry Contest in 600 Rounds' (*Ropyyakuban uta'awase* (1193), whose participants were both patrons and professionals, to determine how far the judge, Fujiwara no Shunzei (1114-1204) allowed these social concerns to shape his criticism and comments.

"Women poets and their contributions to the *Shinkokinshū*"

Laurel Rasplica Rodd, University of Colorado, Boulder

Of the ninety-one named female authors of poems in the *Shinkokinshū* (almost one-quarter of the 398 named authors of 1979 *waka* in the anthology), most are represented by only one, two, or three poems. Those represented more extensively include a group of ladies-in-waiting who served at the court of Emperor Gotoba or his immediate predecessors: Bifukumon'in no Kaga, Shunzei-kyō no musume, Echizen, Fujiwara no Seishi, Gishūmon'in no Tango, Hachijōin no Takakura, Inbumon'in no Taifu, Kojijū, Kunaikyō, and Nijōnoin no Sanuki. In addition, there are poems by a few well-known members of the imperial family such as Shikishi Naishinnō, who is represented by 49 poems - more than any other woman poet, as well as several famous women poets of the past, including Akazome Emon, Ise, Izumi Shikibu, Murasaki Shikibu, and Ono no Komachi.

This paper will focus on the poetry and poetic activities of the women poets Gotoba gathered at his court as part of his project to encourage the production of poems suitable for the great anthology he planned, examining their poetic contributions and also, as much as can be discovered, their roles in the various poetic events that led up to the compilation of the *Shinkokinshū*.

3:20 p.m.-5:00 p.m. — Session 4

SESSION 4-A: PEDAGOGY PANEL [HURON ROOM]

Chair: **Eiko Ushida**, University of California, San Diego

Panel Title: 「東日本大震災と日本語教育: 「太平洋の架け橋」構築に向けた試み」 (Building a Bridge to the Pacific Through Japanese Language Education)

2011年の東日本大震災で亡くなったJET外国語指導助手「モンティ先生」は米国の大学で日本語を学び、日本文化を愛し、岩手県で「太平洋の架け橋」となる夢を実現した。本パネルでは、モンティを記念し9人の日本語教師が共同開発した中上級用日本語教材「モンティの明日への架け橋」を紹介する。

風化しつつある「震災」についての授業をいつどのように導入できるかは難しい。本パネルでは様々な学習環境でこの教材を利用した実践報告を通し、それらの活動の評価、改善点、将来性について言及する。本教科書は従来の教科書とは異なり、国際交流、コミュニティ、エネルギー、歴史・文学などの幅の広いトピックの中で震災について深く考える機会を与える。トピック別セマティックユニットの形で学習者が資料について学習しながらエッセンシャルクエスションの答えを導き、知識構築と日本語能力の向上を図る。生教材には足場作りの学習活動が豊富に取り入れられている。

発表1では東日本大震災関連の教材や活動を体系的に分析し、その傾向と効果的な利用法を考察し、最後に「モンティの明日への架け橋」の概要を紹介する。発表2は中級レベルで選択学習の一つとして「震災短歌：被災者の心の声」のユニットを取り入れた例を紹介し、振り返りを使った学習過程を考察する。発表3は日本文化のクラスで「職人：東北の伝統工芸の復興と人と人との架け橋となる職人の技」のユニットを使った例を紹介し、学習者の知識と理解度を検証する。発表4は日本語4年生のインディペンデント・スタディーで「自然災害：歴史から学ぶこと」のユニットで行ったブログ活動例を紹介し、被災地との関わりと自主学習促進の関係を考察する。

「東日本大震災関連教材の傾向と利用法の考察」(Materials to teach the Great East Japan Earthquake: Tendency and effective implementation)

Eiko Ushida, University of California, San Diego

2011年の東日本大震災は米国にいる日本語教育?日本研究に携わる我々にも大きな衝撃を与えた。震災後、米国で様々な活動を企画実行し、何らかの形で被災地支援を試みた教師は多い。さらに、日々の授業においてもレベルに関わらず日本語?日本研究のクラスに震災の内容を取り入れていることも伺える (Hatasa 2013)。

しかし、震災後4年目となり、この傾向が続いているかどうかは疑問である。AATJ年次学会においても2012年から2014年にかけて震災に関する日本語教育の実践報告は年々減っている。震災自体が風化するように海外の日本語教師も震災について忘れていくのが自然であり、今後震災を授業で扱うかどうかの決断も徐々に変化していくだろう。震災後、特に2012年以降に震災を世界に発信するサイトやメディア (国際交流基金 2011)が増え、教材開発 (IUC横浜、原田 et al. 2014) や教科書改訂 (森岡 2013)、教師の実践報告 (Mori 2013; Nagai 2014; Takagi 2014)などが見られるが、この4年間ににおける発展や傾向が把握できないため、今も個人で教材や教え方を模索している教師もいよう。

そこで、本発表では2011年以降の日本語教育・日本研究に関する学術論文、学会の発表記録、ワークショップの記録、日本政府・民間組織の活動記録をもとに、米国の日本語教育で利用できる東日本大震災に関する教材や活動を収集し、それらを体系的に分類し、その傾向を分析する。今後震災を授業に取り入れようと考えている日本語教師への参考リソースとして提示するとともに、効果的な利用法の可能性を考察する。

最後に中上級用日本語教材「モンティの明日への架け橋」の概要を紹介し、この教材の特長と意義についても言及する。

「震災短歌：被災者の「聲」を聴き被災地を想う」(Shinsai tanka: Listening to victims' voices and reflecting on their lives)

Kazue Masuyama, California State University, Sacramento

震災で傷ついた心を癒やし、生きる活力を取り戻す「心」の復興を支援する文化芸術活動は、被災者にとっては必要不可欠なものと思われる。この発表では、汚染した自宅に一時帰宅した被災者の詠んだ短歌とその歌人とのインタビューを教材に作ったセマティックユニットの実践報告を行い、その効果の検証を報告する。

日本語教育において、短歌や俳句などの定型詩の導入はまだ新しい分野の為、何を、どのように導入するかは試行錯誤の段階にある。過去の実践報告によると、日本語のことばのリズム感や季節感・情緒などの文化学習が可能であり、異なった視点と経験をもつ読者間での意見交換や短歌の創作を通し、発想力、批判的思考力、コミュニケーション能力なども高められると言及されている (北島 2014; 黒川2008; 柴田・横田 2013; 藤原 2009)。こういった利点を踏まえ、この震災短歌のユニットは様々な足場作りのアクティビティを導入し、多角的視点から丁寧に短歌を吟味し、歌人との対話機会をもうけ、学習者に被災地の「心」復興を考える機会を与える。

この実践は中級レベルで選択学習の一つとして、震災のトピックに興味のある学習者を対象に行った。授業では、震災と短歌の内容学習をしながら、感情表現や推測表現なども導入した。アセスメントは正確に質問に答えられるのではなく、どれだけ深くトピックや学習過程の振り返りができたかで行った為、ジャーナル、対話的アセスメント、面談を使った(佐藤・熊谷 2011)。この発表では、学習者は何を学んだか、日本語能力は伸びたか、知識・日本語以外に何を学んだか(自律性、問題解決能力、批判的思考力)について分析し、教材の効果的な導入方法、その意義について考察する。

「セマティックユニットを通しての職人文化に関する学習者の知識・理解の向上」(Enhancing students' understanding of "shokunin" through thematic units)

Junko Tokuda, University of Memphis

National Standardsに示されるように、現在では内容重視の外国語教育が求められている。CBIは内容教育と言語教育を同時に実現できる活気的なアプローチとして第二外国語教育にも取り入れられており、その一つにセマティックユニットが含まれる(Stryker & Leaver 1997)。先行研究からはCBIを通して学習者の言語学習、内容学習、やる気、興味などが高められたことが示されているが(Dupuy 2000)、導入にあたってはある程度の言語能力に加え、内容理解のための専門用語やテーマに関する事前知識が必要とされるという報告もある(Klee & Tedick 1997)。

本研究は日本文化のクラスを受講した9名を対象に行われ、アメリカ人には馴染みの浅い「職人文化」について、この教材を使いどの程度理解を深めることができたかを検証した。伝統的工芸品は先祖代々受け継がれ100年以上の歴史を持ち、伝統的な技術・技法を使い、職人によって主に手作業で作られる工芸品のことである(経済産業省 2014)。全国で210品目、東日本大震災で多大な被害を受けた東北地方では21品目とその指定を受けている(東北経済産業局 2008)。本ユニットでは学習者に職人文化とは何かを問い、現代の大量生産の時代に職人のもの作りから何が学べるのかを考えさせ、東北の伝統工芸とその復興状況について話し合う機会を与える。学習者による習熟度の違いや変化をより深く考察するため、検証には教師によるユニット導入前後の内容に関するインタビュー、学習者自身の自己評価、ユニットに関するアンケート及びインタビューを用いた。

国も震災復興のために伝統的工芸品を支援する取り組みを行っており、日本語教育でこうした問題や文化を取り上げることは価値があると思われる。本発表では本教材が学習者にもたらす意義と利点について考察する。

「歴史から学ぶ：ブログを通じた被災地との対話と自主学習」(Using a blog for building dialogues with people in Tohoku and enhancing autonomous learning)

Hiroko Harada, University of Alaska, Anchorage

自然災害は世界のどこでも起こり、同じような災害が繰り返されることが多い。東北の自然災害に関する学習ユニット「自然災害：歴史から学ぶこと」では自然災害から人は何を学ぶかを問い、そのような苦い経験を繰り返さないために、どのような自覚をもち、何をしなければならないのだろうかを問いかける。しかし、遠い日本での出来事とその歴史的背景は、なかなか学生が身近に感じて自主的に取り組むことは難しい。この発表では日本語4年生のインディペンデント?スタディー受講者4人がブログを通じて被災地と関わった自立学習の試みを報告する。

ブログ活動は、学習の視点を大きく変え、考え合う学習、自主学習に役立つアセスメントとして、言語学習に取り入れられており (Pinkman 2005; 熊谷2008; 佐藤2010)、他者との「対話」を通し、社会とのつながりも生まれる。

このインディペンデント?スタディーでは被災地の「今」を知る学習環境としてブログを作った。受講者は学習ユニットを独自のペースで進めつつ、同時に日本人留学生、日本語チューター、被災地の日本人大学生と震災についてブログで自然災害に対しての考え方や行動のあり方について活発に意見交換した。さらに、受講者は自主学習過程で生じた疑問を提示し、意見交換を振り返り、学習を進めた。このような他者との建設的な「対話」を繰り返すことで、震災について深く考えさせ、対話とブログを分析することで、学習者が自主的に何を学んだかを考察した。

震災の悲劇を繰り返さないための努力は大切である。このユニットを通し、今後起こりうる自然災害と各自の生活の関わりについて考えることは有意義ではないだろうか。

SESSION 4-B: PEDAGOGY PAPERS [MICHIGAN ROOM]

Chair: Kiyomi Kawakami, University of Iowa

「中級から上級への「描写力」の育成」(Developing the ability to describe: From intermediate to advanced)

Yoshiko Tomiyama and Emi Mukai, Stanford University

ACTFLによるプロフィシェンシーのガイドラインをカリキュラム・デザインを中心に据えている本校では、1年生終了時に初級・上、2年生終了時には中級レベルへの達成を目指してコースが構築されている。また、1年生と2年生を対象に学年末に話す能力を測るSOPI (Simulated Oral Proficiency Interview) を毎年行っている。評価はACTFL-OPIの資格保持者2名によって行われ、客観的に測定されている。このテストを通して、初級上から中級下への達成は比較的容易になされる一方で、中級中から上、さらには上級レベルへの到達は非常に難しいという現状が見られる。特に、上級レベルへの道を阻む大きな要因は、描写力をつけることの難しさ、さらにそれに伴う段落構築の難しさであると思われる。今回の発表では、日本語学習履修時間数が約250時間から約350時間の中級下レベルから中級上レベルの学生の学習者を対象に、「上級へ向けてのレベルアップ」を目指すためのさらなる一押しとなるようなdescriptionの能力、すなわち「描写力」を伸ばすために行った、教室内外の活動や取り組み及び上達を紹介する。渡辺(2013)の研究では、日本語上級学習者に対して略式OPIを活用し、インタビューの内容を学生自身に書き起こさせることによって、必要なことを各自に気づかせる手法が提案されている。本研究では、特に「描写力」に焦点を当てた発話練習を数回行い、その際の「気づき」の記録を「気づきシート」にまとめさせ、学習者本人に上達の度合いが見えるような工夫を行った。その実践報告と共に、今後の課題を考察する。

「上級日本語授業における映画使用の新たな可能性：「文化比較」を越えた「価値観」の理解、尊重を目指して」(Understanding individuals' personal values through a movie)

Naho Maruta, Wesleyan University

本研究は筆者が2014年秋学期に行った内容重視の上級日本語授業の実践報告である。この授業では映画「県庁の星」(2006)を使用し、言語・文化・社会的要素に焦点を当てるだけでなく、各登場人物が持つ価値観に触れ、実社会での他者の価値観への理解と尊重を目指す。視聴覚教材としての映画の使用は、主に前述の三要素に焦点が当てられており、既にその効果は大いに評価されている(大川2006等)。しかし、特に文化的要素に関しては各国との「比較」が多く、日本化として一つでまとめられ、時には間違ったステレオタイプを生み出す危険性もある。個人の「価値観」は文化的要因のみならず、様々な要因で形成されており、特にグローバル化した現代社会においては、個人の「価値観」は、国や文化を越え、時に違い、時に共通する。よって、文化理解や比較だけでなく、個人の価値観も理解、尊重することにも重点を置いて指導していくことが重要であると考えられる。この映画は、県庁のエリートである主人公(男)とスーパーのパート(女)がいがみ合いながらも、それぞれの価値観を理解していく恋愛物語である。この映画を選んだ理由は、前述の通り様々な要素が内包されているだけでなく、幸せの定義(エリートであることは幸せなのか等)や恋愛、仕事における価値観などについて話し合えること、更に、「もしあなたがいたら～」といった仮定条件の練習の機会が多く持てることなどである。学生は事前にワークシートで聴解や内容質問、意見を記述する宿題をし、授業ではそれらをもとに議論を広げる。発表では授業の詳細や学期末に行うアンケートの分析結果を述べ、映画使用の新たな可能性を探る。

「学習者間の自由会話における共感の表明：会話を通じての社会的関係の構築を目指して」(Emphatic moments in free conversation between learners of Japanese: Toward the cultivation of social relations)

Kiyomi Kawakami, University of Iowa

会話において様々な方法で相手への共感を示すことは、会話を充実したものにし相手との社会的関係を構築するための重要な要素である。日本語母語話者間の会話では、会話の参加者は様々な会話技術を用いて相手に共感を表しながら会話を

展開していく(西阪ほか 2013)。一方、日本語学習者間の会話データを観察すると、中・上級の話者においても、相手に対する共感を十分に示すことができないために会話が展開せず、進行中の話題が立ち消えになる事例も見られる。自由会話において会話の展開に瞬間瞬間で対応しながら相手への共感を表明することは、学習者にとって容易ではない。本研究では、これまであまり取り上げられていなかった学習者同士の自由会話を調査資料とし、相手の話者への共感を示すことができている事例とあまりできていない事例について、会話の展開を分析する。

本研究で用いた調査資料は、中・上級の日本語学習者同士が自由会話をする「日本語サロン」での2者間会話データ(20ペア、計10時間)である。進行する会話の中で相手への共感を表している学習者は、「態度のすりあわせ」や「共通性を示す」(西阪ほか 2013)など母語話者間の会話データで観察されるような複雑な会話技術を用いている。一方で、会話が十分に展開していない事例では、一方の話者が相手への共感を十分表せていない例が見られる。さらに本研究では、学習者に会話中自らが行っている行動に対する気づきを促し、教室で学習する相槌や感情表出語だけでなく多様な会話技術を用いて共感を表明できる話者、ひいては相手との社会的関係を構築しながら会話に参加できる話者を育成できる可能性について、議論する。

「VoiceOver Narration を使ったゼロ初級日本語クラスにおける自己紹介プロジェクト」("Self-introduction" project through voiceover narration in the lowest novice-level Japanese language course)
Suyu Kuo, Sachie Koizumi, and Kenji Endo, University of Pennsylvania

ゼロ初級レベルの学習者とは文字通り日本語をゼロから学習し始めた学生の事を指しており、日本語能力がまだ乏しいため、一般的に目標言語を使って自分自身を表現する能力が限られているという印象を持たれがちである。それ故にゼロ初級レベルのクラスでは日々「言葉の規範性」に重点を置いた教室活動が頻繁に行われている。しかし、本来「言葉」には規範的側面と創造的側面の両方の側面があるとされ、これらは二項対立的に捉えられるべきではなく、両方が互いを影響していると考えられている(Hymes, 1974)。さらに、佐藤、浜田、ナズキアン(2009)はこうした言葉の「規範性」だけではなく、「創造性」を培うための教室活動をなるべく初級レベルの早い段階から取り入れていくことの重要性を唱えており、4つの段階(視聴者を意識する→既存の物を混ぜて新しい物を産出→積極的な自己表現→自分の作品が相手にどう受け入れられるかを体験する)を取り込むことによって、より効果的に学習者の「創造性」を引き出すための活動が実現できると述べている。

本発表では2014年の秋学期にアメリカ東海岸の私立大学のゼロ初級レベル日本語クラスで行われたVoiceOverというパワーポイントを駆使して制作された「自己紹介プロジェクト」についての実践報告を行う。プロジェクトの手順、図書館との連携によるワークショップ、実際の作品紹介、学習者間でのコメントのやりとり、フィードバックを通して、「ゼロ初級の学習者＝言葉の規範性を受け身的に学ぶ人達」という従来のステレオタイプから脱却し、彼らの持つ創造性を引き出すことによって主体性を持った一社会人へ成長していく過程を支援した教育が実現可能であることを示唆したい。

SESSION 4-C: PROFICIENCY ASSESSMENT SIG PANEL [OHIO ROOM]

Chair: Ken'ichi Miura, Franklin & Marshall College

Panel Title: 「Proficiency Guidelines の応用と実践」 (Practical Application of Proficiency Guidelines)

ACTFL Proficiency Guidelines 2012は、四技能においてNovice (初級) からDistinguished (卓越級) までの各レベルにおける能力を定めている。このガイドラインは学習者の能力を測定するためだけでなく、教師が学生の言語能力を上レベルに引き上げるための指針としても活用できる。本パネルは、後者の活用法に重点を置き、学習者のproficiencyを向上させるためには何が必要か、実際にどのような指導が効果的かを示し、今後の日本語教育に貢献することを旨とする。発表1、2、3は、話す能力に焦点を当てる。発表1では、日本語能力試験、OPIの各レベルにおける漢字熟語の種類、頻度の分析結果を報告する。また、上級以上のみに現れる漢字熟語を分析することにより、上級に向けた効果的指導法を提示する。発表2では、OPIにおける上級の能力である「ナレーション」とはどのようなものであるかを分析する。また、上級のナレーションに到達しない原因の分析をもとに、効果的な指導法を提案する。発表3は、同じく上級の能力である説明、叙述の能力を高めるために実際に行った指導の報告である。この発表では、「オーラルポートフォリオ課題」、そのフィードバック内省によってどのように学習者のproficiencyを上級に導けるか、という点に焦点が当てられている。発表4は、読む能力を高める指導の報告である。読解のproficiencyのガイドラインを基に、多読教材を使用した指導結果は、読むという作業が他の技能にも影響し、学習意欲向上に貢献した、と結論している。以上のように、本パネルは、ガイドラインを基にした多数の実際の授業の報告、授業案を紹介する。それらを様々なレベルの日本語教師と共有し、より有効な言語教育を共に考察し実践を目指すことが本パネルの目標である。

「OPI コーパスに現れる漢字熟語：話技能向上に欠かせない漢語とは何か」 (Two-character kanji compounds in an OPI corpus: Which kanji compounds are essential for advancing speaking skills?)
Mamoru Hatakeyama, Carnegie Mellon University

日本語の内容語はその多くが漢字熟語だとされ(柴谷、1990)、OPIにおいても漢語・抽象語彙の重要性(横山、2000)が指摘されてきた。では実際にOPIにおいては、どのような漢字熟語が使われているのか、またそれらの頻度・レベル別の分布から推測される重要度の違いを探るため、初級から超級までのOPIコーパス(354件のインタビュー、のべ約265万語)の形態素分析をデータとし、漢字熟語を「漢字で表記される2字以上の語」と定義し、今回は特にサ変名詞に着目し、研究課題を以下のように設定した。研究課題1. その語の能力試験での級とOPIの初級下から超級までの10レベルのうちいくつかのレベルに現れるかと関係があるか。研究課題2. 広いレベルにおいて多く現れ、一般的に重要度が高

いと思われる漢字熟語は何か。研究課題3、頻度が比較的低いが、上級以上においてのみ現れる漢字熟語は何か。結果として、研究課題1については、日本語能力試験の級レベルが低いほど、より多くのレベルで出現する傾向があった。また、全体としては2級の語彙が多いものの、1級、級外も3割弱程度あった。研究課題2については、例えば3級語彙の「経験」は、初級上以上の8レベルにおいて見られたが、特に中級下から上で高頻度で現れるなど中級での重要が高いと見られる。一方、2級語彙の「影響」は、初級上と中級中以上の7レベルで現れたが、特に中級上以上で高頻度だったことから上級に欠かせない語と考えられる。研究課題3については、例えば2級語彙の「解放」は上級下以上の4レベルにおいて現れるが、超級においてのみ高頻度で現れる傾向があり、前出の「影響」よりもさらに上のレベルの語彙である可能性が推測された。

「ACTFL運用能力ガイドラインにおける上級レベルのナレーション」 (Narration at the advanced level as expected in the ACTFL Proficiency Guidelines)

Suwako Watanabe, Portland State University

ナレーションは、ACTFL運用能力ガイドラインの上級話者ができなくてはならないタスクの一つである。ナレーションとは、「連なったできごとや活動を論理的にかつ順序をおって述べ」る能力とされる。さらに、上級レベル内の熟達度を決める基準には、foregrounding・backgroundingの有無、アспектコントロールの程度の差、状況描写を織り交ぜるかどうかといった精度の差などが関わっている。旧ACTFL OPIテスター養成マニュアルでは、中級話者のナレーションは、静止画をいくつか並べたようなもので、上級話者のそれは、動画的であると説明している。また、Labov (1972)のナラティブについての洞察では、精度の高いストーリーは、要約、オリエンテーション、出来事、評価、結果、コードという構成をなしており、熟達度の低い若年層のナラティブと熟達度の高い語り手のものを比較すると、詳細情報量や出来事を再現する際の鮮度・迫真さの程度などに差があることが示されている。本発表では、中級話者のナレーションの例を取り上げ、状況描写や詳細の欠落、引用の使用、主要情報の省略などといった不備やその原因を分析し解明する。そして、詳細な描写を含む上級レベルのナラティブと比較し、どのような言語的要素が足りないのかを明らかにする。その上で、教室の現場で、どのような指導をしていくかを示唆する。

「口頭説明叙述能力向上を目指して：実践例」 (An idea for improving oral narrative skills in the intermediate JFL course)

Noriko Taira Yasohama, Northwestern University

上級到達に向け、説明叙述能力を養うのが中級コースの目標の一つだが、中上級文型や表現を入れながら、それまでに身につけた基礎文型を自然な日本語に組み立て、説明叙述ができるようにするのは、なかなか容易ではない。口頭で説明叙述練習を行う場合は、授業中受講生一人ひとりに発話させるのは効率が悪く、全員同時に話させても、ただ話させるにとどまり、的確なフィードバックが与えられない。そこで、口頭説明叙述能力向上を目的に、2011年度より三年間中級コースにオーラル・ポートフォリオ課題を導入してみた。この課題は、2012年7月ハワイ大学National Foreign Language Resource Center (NFLRC) Summer Instituteで行われた日本語評価ワークショップ参加中に作成したもので、学習者一人ひとりが口頭で説明・叙述したものをビデオ録画し、ウェブ上に提出・保管し、自己評価と教師との面談を通して改善点を確認し、ビデオの取り直しをするという作業を、課題ごとに繰り返してゆくものである。このオーラル・ポートフォリオ課題を、2012年9月から三年間大学の中級コースに導入し、毎年改善を重ねてきた。本発表は、導入二年で出た反省点を生かした3年目の実践報告である。

「読解のプロフィシエンシー：多読のクラスからの報告」 (Reading proficiency: Report from an extensive reading class)

Yuka Kumagai, University of Southern California; Noriko Hanabusa, University of Notre Dame

ACTFL Proficiency Guidelines 2012の読解の項目は、初級では「キーワード、同属言語語彙、決まった表現」、中級では「ゆるやかにつながった文章」の理解ができることを指標として挙げている。そのサンプルとしては、初級では単語だけが示された単純な広告が、中級では段落を構成しない文の連なりが例示されている。初・中級に共通する指標は「予測可能」または「よく知っている」話題や情報に関わるものが読めることである。しかし、大学の「多読」のクラスでは学生たちは初・中級でもストーリー、すなわち段落として相互に強いつながりを持った文章の連なりを読んでいる。身近ではない情報も理解している。精読による細かい理解という手段を経ることなく0から1へ、2へとより上のレベルへ読み進んでいく。これを可能にする要はmotivationの維持である。読書の喜びや読書への興味には個人差があるが、多読のクラスではこれらを盛り上げ維持できるような支援を行う。多読によるmotivation維持の根幹は、学生が主体的に読むものや読む速度を選択し、常に短い本を読み終えるという達成感を得られることであるが、その他の様々な活動（絵から読み取ること、シャドーイング、読み聞かせ、ブックトーク、要約など）を通して、四技能を無意識的、意識的に活用することも学習意欲を刺激していることが学生のフィードバックから伺える。本発表では、読解のプロフィシエンシーのガイドラインを多読本のレベルと比較しながら再考すると共に、多読のクラス内で実践している活動を報告し、効果を考察する。

SESSION 4-D: STUDY ABROAD SIG PAPERS [MISSISSIPPI ROOM]

Chair: Mari Noda, Ohio State University

「日本語での自立を促す学生主体の活動」 (Empowering students in Japanese through student-led activities)

Mari Noda, Karen Curtin, and Ai Terada, Ohio State University

授業の一環であれ、課外活動であれ、学生主体の活動は学習者の参加を通して、学習を促す可能性を秘めている。本発表では、留学プログラムにおける学生主体の委員会システムを、「導かれた参加」（ロゴフ1990）の応用例と捉え、その実践の報告、問題点の考察、日本語教育に於けるより効果的な学生主体活動への提言をする。「導かれた参加」は、全ての学習が社会文化活動というコンテキストで、学習者本人より高度な技術を有する人に導かれて成り立つとし、学生中心教師中心という単純な振り分けと一線を画す。留学は、一見文化社会に囲まれた学習環境を提供する。その一方、実際には自分たちをとりまく文化に「お客様」、「外の人」としてしか参加できない留学生は、欲求不満に陥ることも少なくない。学生主体の委員会システムは、教師やレジデントディレクターのガイダンスを得ながら行う作業を通して、学生本人がプログラム作りの実践者として行動し、社会的な役割を担うきっかけを作る。このシステムを実施した8週間の留学プログラムの成果はOPIの伸びで実証され、委員会プログラムシステムにより、学生達のプログラムに参加しているという意識も高まった。その一方、委員会活動そのものが、地域とより密接に結びついたという気持ちには必ずしも貢献せず、むしろ受け入れ大学の学生との交流の時間を減らしたという意識もあることが分かった。発表ではそれぞれの委員会が直面した問題点を具体的に検証し、学生主体の問題解決を目指して行われたガイダンスに言及し、今後に望む改善点を浮き彫りにする。その上で、他の状況に於ける学生主体活動の可能性を示唆する。

「留学生の大学寮における経験と学び」(Experiences and learning in dormitories during study abroad in Japan)

Fumi Yamakawa, International Christian University

本研究の目的は、日本の大学で日本語を学ぶ留学生が大学寮においてどのような経験をし、何を学んでいるのかということとを明らかにすることである。

これまで、留学生に対する日本語教育研究では、日本語教師が教室でいかに効率よく日本語を教えるかということが中心に議論されてきた（尾崎, 2001; 春原, 1995）。そのため、教室外における留学生の具体的な生活には関心が向けられず、そこでの学びの意義についてはほとんど注目されてこなかった。特に、大学寮は最も研究の進んでいない分野の一つであると指摘されてきた（Ogden, Dewey & Kumai, 2011）。

そこで本研究では、まず、一次調査として留学生35名に対し、ソーシャル・ネットワーク形成に関する質問紙調査および聞き取り調査を行った。その結果、留学生は複数のコミュニティに属しているものの、その中でも特に大学寮において濃いソーシャル・ネットワークを形成していることが明らかになった。そのため、二次調査では大学寮に焦点を当て、留学生35名中の5名とその友人である日本人学生10名を対象に、さらなる聞き取り調査を行った。その結果、留学生たちは、寮生たちと生活を共にする中で様々な経験をし、日本語を習得するといった学びだけではなく、寮の一員として成長するといった人間形成にも関わるような大きな学びをも獲得していることが明らかになった。

以上の調査結果から、留学生に対する日本語教育は、従来のように日本語の知識の習得のみを目指すのではなく、日本語を通してお互いにつながり、影響し合いながら変容し、成長していくことを目的とすべきだと考える。

“Study Abroad in Japan: A Case Study of Three American Undergraduates’ Challenges and Cultural Learning”

Hiroimi Tobaru, Ohio State University

With the economic growth of East Asian countries, studies on these cultures and languages have become popular in the US. Research has shows number of American college students who study abroad in these countries has also increased (Institution of International Education, 2013). However, previous studies have shown that these students often find cultural differences between their based culture (C1) and target culture (C2) as obstacles to interact with native speakers (Burns, 1996, for example). This case study presents three American undergraduate learners’ cultural experiences during study abroad (SA) in Japan. Data was collected through retrospective interviews with three undergraduates who completed their ten/eleven months SA in Japan. The interviews were focused on students’ challenges and how they overcame the challenges, which were elicited through semi-structured questions. In the presentation, I will focus on SA students’ challenges through interaction with native speakers in Japan. The findings indicate that learners, who had wider social networks and interacted with native speakers with various social statuses, also gained better understanding of how things are done in Japanese culture. These findings parallel with Siegal (1995) and Iwasaki’s (2011) findings, both on SA students’ interaction with native speakers and their understanding of polite styles in Japanese. It is also revealed that although there were individual differences in their experiences in Japan, all SA students have reconstructed a positive image of their home country (the United States) upon their return despite the fact that they had held a negative image prior to their SA experiences. I will discuss the SA students’ interactional experiences and their challenges in Japanese society in terms of Ignored and Suppressed culture (Walker, 2000), including collectivism and negative politeness (Brown & Levinson, 1978).

SESSION 4-E: JAPANESE FOR SPECIFIC PURPOSES SIG PAPERS [COLORADO ROOM] [3:20 – 4:10 P.M.]

Chair: Kiyomii Fujii, Kanazawa Institute of Technology

「学習者の依頼・お礼のメールに見られる問題点の考察」(Analysis of learners' request/thank you emails)

Junko Kondo, University of Michigan

本研究はプレキャリアのためのビジネス日本語を学ぶ学習者のためのビジネスメールの書き方の指導のあり方を探るため、学習者が書いた「依頼」と「お礼」のメールを収集し、学習者は依頼・お礼の場面でどのようなメールを書くのか、適切なメールが書けない場合、それはなぜなのかを構成・展開・表現形式の点から分析し、考察したものである。矢田(2014)は母語話者と学習者の依頼・断りのメールを分析し、学習者の習得困難な点として①場面（状況）設定の正確・適切な理解、②相手の負担への配慮のストラテジーの適切な使用、③「断り」のストラテジーの適切な使用と表現の選択の3点を挙げている。本研究において指導前に学習者が書いた依頼・お礼のメールでは、曖昧な件名、基本的な構成の

間違い、文法上の間違い、語彙の選択の間違い、話し言葉的な表現の使用、英語の直訳的な表現の使用、配慮表現の欠如などが見られたが、何回かの練習とフィードバックにより、メール本文の構成、展開の仕方、話し言葉的な表現の使用、敬語使用の間違いなどには改善が見られ、適切に書けるようになることが分かった。一方、英語とは異なる日本語的な言い回しの表現や、文と文を接続する表現の習得が困難であることが明らかになった。相手の負担への配慮、関係維持への配慮表現については母語話者のようにバリエーションはないが、定型のものであれば、指導することにより使えるようになることが分かった。この結果をもとに、効果的な指導法を提案したい。

「Problem Based Learning (PBL)を通してコミュニティと繋がる日本語学習」(PBL through community involvement to enrich Japanese language learning)

Kiyomi Fujii and Brent Wright, Kanazawa Institute of Technology

Problem Based Learning (PBL) は、医学、工学などの専門分野で幅広く使用されている学習方法である。近年、外国語教育においても取り入れられその有効性が示されている。しかし、学習者が問題に対して解決策を提案し、学習言語で発表、授業が終了するというケースが多くみられる。本プロジェクトは、学習者が地域での問題を見つけ自らが解決策を見出し提案、地域住民の意見を聞きながら、日本人学生との協働作業で持続可能なプロジェクトとして取り組んだ実践報告である。工学系の大学では、地域連携、産学連携事業などのプロジェクトが多数あるが、外国語教育と結びついたものは少ない。本プロジェクトは大学で実施されている問題解決型教育を学習言語を使用し実施した。地域での問題を発見し、解決策を提案、プロトタイプを作成し、実際に使用してもらえるものの作成に取り組んだ。具体的には、日本語の教科書のトピックの一つ、家庭ゴミの出し方にフォーカスをあて、聞き取り調査、ゴミの出し方についてのパンフレットが日本語のみであることに着眼、解決策として英語版を作成した。このプロジェクトを通し学習者は、日本語パンフレットを英語に翻訳するだけの作業に止まらず、様々な科学技術に関する単語を修得できた。また市役所、在住外国人、日本人学生と協働作業することにより日本語学習だけではなく地域との繋がり、再生可能な資源について、資源ゴミの回収方法など多くの学びが得られた。発表では、プロジェクトを通しての学習者のモチベーション、学習言語でも地域連携や社会貢献の可能性と日本語教育へ有効性と課題について言及する。

SESSION 4-F: LITERATURE PAPERS [ARKANSAS ROOM]

Chair: Kazue Harada, Washington University in St. Louis

“EnJoe Toh: Butterflies and experimentation in literary language”

Michael Tangeman, Denison University

This paper considers the literary experimentation of EnJoe Toh (b. 1972) in his 2011 short story “Dôkeshi no chô (“Harlequin Butterflies”) that won the Akutagawa Prize for the latter half of 2011. Selection committee member Shimada Masahiko praised it because “the work itself is a treatise on language and fiction, and on the action of imagining,” and Kawakami Hiromi wrote that the work made her envision a world in which Schrodinger’s cat was simultaneously alive and dead. However, Yamada Amy argued that EnJoe’s experimental language was an impediment to comprehending his literary world.

One source of inspiration for the story is a 1974 sketch of the fictitious harlequin butterfly (*Arlequinus arlequinus*) by novelist and lepidopterist Vladimir Nabokov (1899-1977). EnJoe builds around this fanciful insect a narrative that playfully interrogates issues concerning translation and the writing process, as well as motives and methods for second-language acquisition. The result is a narrative that is both a multivalent homage to Nabokov, and an exercise in challenging a contemporary Japanese literary norm that calls for language to communicate transparently, fluidly. EnJoe’s language is opaque, and thereby calls attention to itself; it startles the reader.

In “Butterflies,” EnJoe disorients and defamiliarizes the reader by manipulating form and content. The narrative is circular (its ending looping back to events of the story’s beginning); portions of the narrative feature language use that is deliberately ungrammatical and/or stilted; characters change genders; and, the subject/topic character is elusive. This paper will attempt to answer some of the questions raised in EnJoe’s experimental narrative.

“Canon formation in the Western reception of Dazai Osamu: Reading *Regretful Parting*”

Guohe Zheng, Ball State University

The larger political context between the U.S. and Japan has continually colored postwar studies of Japanese literature resulting in a canon produced in the first fifteen postwar years, “a canon that conferred aesthetic allure upon the erstwhile enemy.” U.S. receptions of writer Dazai Osamu (1909-1948) is a good example of canon formation. Dazai is known in the West mainly for two of his postwar novels, *The Setting Sun* and *No Longer Human*, both of which have been introduced as by a decadent writer “lacking in political reliability or even citizenly virtues” making him aligned with the exotic and apolitical image of Japanese literature. This paper argues against such a view. It examines Dazai’s largely ignored novel *Regretful Parting* (*Sekibetsu*, 1945) and, in so doing, presents a concrete example of canon formation in Western reception of Dazai Osamu. It begins by a synopsis of the novel, a story about the Japan experience of Lu Xun (1881-1936), the most prominent modern Chinese writer. This is followed by a summary of the novel’s overwhelmingly negative reception in both Japan and the West. The negative reception rests often on the fact that the novel was commissioned by the authorities during the war to justify Japan’s “Greater East Asia co-prosperity Sphere.” Crucially, such views were put beyond challenge by Takeuchi Yoshimi, Japan’s top scholar on Lu Xun, who stated that the Lu Xun portrayed in the novel is merely “the author’s self-portrait.” My argument is presented after this. I propose that there are two agendas in the novel, one overt and the other covert. By analyzing the two different agendas, I contend that the generally accepted view turns a blind eye to the covert agenda of the novel and perpetuates a mistaken statement by Takeuchi Yoshimi leading to a canon that sorely needs a reexamination.

"Why does he kill so many cats?: Murakami Haruki's cat novels"

Chiaki Takagi, University of North Carolina, Greensboro

This paper examines treatment of cats in the works of Haruki Murakami. Murakami is known as a cat lover, and in his works cats consistently appear as part of his recreation of modern Japan's social landscape. There are progressive changes in Murakami's treatment of cats that seems to link to his engagement with Japanese society. In this regard, many of his works can be referred to as cat novels. However, it is hard to identify Murakami as a cat lover if you judge from the way cats are treated in his works as they are often become nameless victims of unreasonable violence. In his early works, however, cats are quietly performing their roles with no lines to speak. In his later works, his protagonists start having special relationships with cats, and cats play more significant roles in relation to the protagonists' psychological battles for freedom. In *The Wind-up Bird Chronicle*, a missing cat symbolizes the protagonist's disorientation in society and the cat's return represents his self-discovery and triumph over the dark side of humanity. The cat survives in this novel. Instead, Murakami includes the scene of brutal killing of zoo animals. Finally, in *Kafka on the Shore*, cats are brutally killed by the mysterious cat killer Johnnie Walker. The goal of this paper is to discuss Murakami's representation of cats in relation to his on-going question concerning humanity and self-search in modern society.

"Posthuman worlds: Subjectivity entanglements and queer families in Ueda Sayuri's *The Ocean Chronicles*"

Kazue Harada, Washington University in St. Louis

In her science fiction series, *The Ocean Chronicles* (2010, 2013), Ueda Sayuri (b. 1964) imagines a variety of coexistent relationships that emerge between humans and non-human following a drastic environmental disruption. For example, humans interact with autosapients and other beings with artificial intelligence in one of her novels and with creatures that are a combination of boat and fish in another. Borrowing from Timothy Morton's concept of "mesh," which refers to the interdependence of life forms, and from Donna Haraway's "companion species" (including transgenic influences between humans and other species), this paper will explore the ways in which Ueda's work challenges an anthropocentric way of seeing humans and non-humans by blurring the borders among life forms. In doing so she interrogates the idea of a coherent subjectivity. In addition I will discuss these interdependent relationships as a substitute for heteronormative reproductive relationships, reading Ueda alongside other women science fiction writers who creatively envision alternative forms of family.

SESSION 5: SPECIAL INVITED PRESENTATION ON ADVOCACY [COLORADO ROOM, 4:15 – 5:00 P.M.]

"Advocacy and Support with the Japan Foundation"

Amanda Rollins, Japan Foundation, Los Angeles

This session will present tools and resources developed and offered by the Japan Foundation, Los Angeles, to assist language faculty members in strengthening and advocating for their programs.

PART TWO

Japan Information Center, 737 North Michigan Avenue, Suite 1000, Chicago, IL
Thursday, March 26, 6:00 – 9:00 p.m.

6:00 p.m.: Refreshments, Membership Meeting and Open Forum

7:00: Keynote Speech, Shigeru Miyagawa (MIT/University of Tokyo)

Open Education / Transforming the Educational Mission of the University

In 2001, MIT embarked on OpenCourseWare, which offers on the web for free teaching materials from virtually all the courses that MIT teaches. This started the open education movement. Ten years later, in 2011, two Stanford professors offered their Introduction to AI class as an e-learning course, and over 160,000 learners registered from some 190 countries. This was the start of Massive Open Online Courses (MOOC). Between the two major providers of MOOCs, edX and Coursera, there are over 10 million registered users. Dr. Miyagawa will trace the history of open education and the aspirations and strategies we see in today's world of OpenCourseWare and MOOCs.

Dr. Shigeru Miyagawa is Professor of Linguistics and Kochi-Manjiro Professor of Japanese Language and Culture, MIT, and Project Professor and Director of Online Education, University of Tokyo. He is jointly appointed by MIT and the University of Tokyo. Dr. Miyagawa has been a pioneer of open courseware and online and web-based projects; they include "Star Festival: A Return to Japan" and "Visualizing Cultures." In Fall 2014 he co-facilitated the Massive Online Open Course (MOOC) "Visualizing Japan (1850s-1930s)."

8:00 p.m.: Networking

AATJ thanks IACE Travel, Kintetsu International, and the Illinois Association of Teachers of Japanese for sponsoring this event!

Other AATJ-Sponsored Events in Chicago

Friday, March 27, 7:30 – 9:30 p.m.

Chicago Ballroom IX (Level 4)

Discussion Forum: Japanese Programs in Higher Education

Moderators:

Nobuko Chikamatsu (DePaul University)

Yoko Katagiri (University of Chicago)

Sayuri Kubota (Eastern Michigan University)

Junko Mori (University of Wisconsin-Madison)

Invited Panelists:

James Dorsey (Dartmouth College)

Janet Ikeda (Washington and Lee University)

Jonathan Zwicker (University of Michigan)

Friday, March 27, 7:30 – 9:30 p.m.

Arkansas Room (Level 2)

“A Web-based Portal to Classical Japanese: *Taketori monogatari*”

(Classical Japanese SIG Presentation and Networking Meeting)

Presenter: Charles Quinn, Jr. (Ohio State University)

Professor Quinn will present a Web-based prototype of an interactive, multimedia introduction to classical Japanese. The materials—text, lexicon, grammar and commentary—are based on four passages from *Taketori monogatari* for this pilot version; excerpts from additional texts are planned. The website aims to be functional across major platforms, from desktop and laptop computers to tablets and handhelds, and is designed to guide students in beginning to develop a rhetorical sense of words and grammar as resources that constitute communicative discourse—that is, text.

Saturday, March 28, 10:45 a.m. – 12:45 p.m.

Sheraton Ballroom I (Level 4)

“Contributions of ‘Border-Crossing Literature’: Perspectives from Linguistics, Literature, Language Education, and Writers”

This panel discussion emphasizes the values of “border-crossing” works, which include contributions to the formation of contemporary Japanese language culture. Study of these works provides students of Japanese with invaluable role models while also contributing to their sense of ownership of the Japanese language. *This panel is part of the Association for Asian Studies program and requires registration for the AAS Annual Meeting.*

Chair: Shinji Sato (Princeton University)

Panelists:

Seiichi Makino (Princeton University)

Nanyan Guo (International Research Center for Japanese Studies)

Yuri Kumagai (Smith College); Shinji Sato (Princeton University)

Shirin Nezamafi (Microsoft Gulf)